

彦根山由来記

此寫眞ハ、スベテ明治九年五月ノ撮影ナリ、



天主閣東面

彦根城 其一

藩主居館及表門極樂橋、遠望、殿、佐和口樓門



本丸ヨリ東南方眺望

21

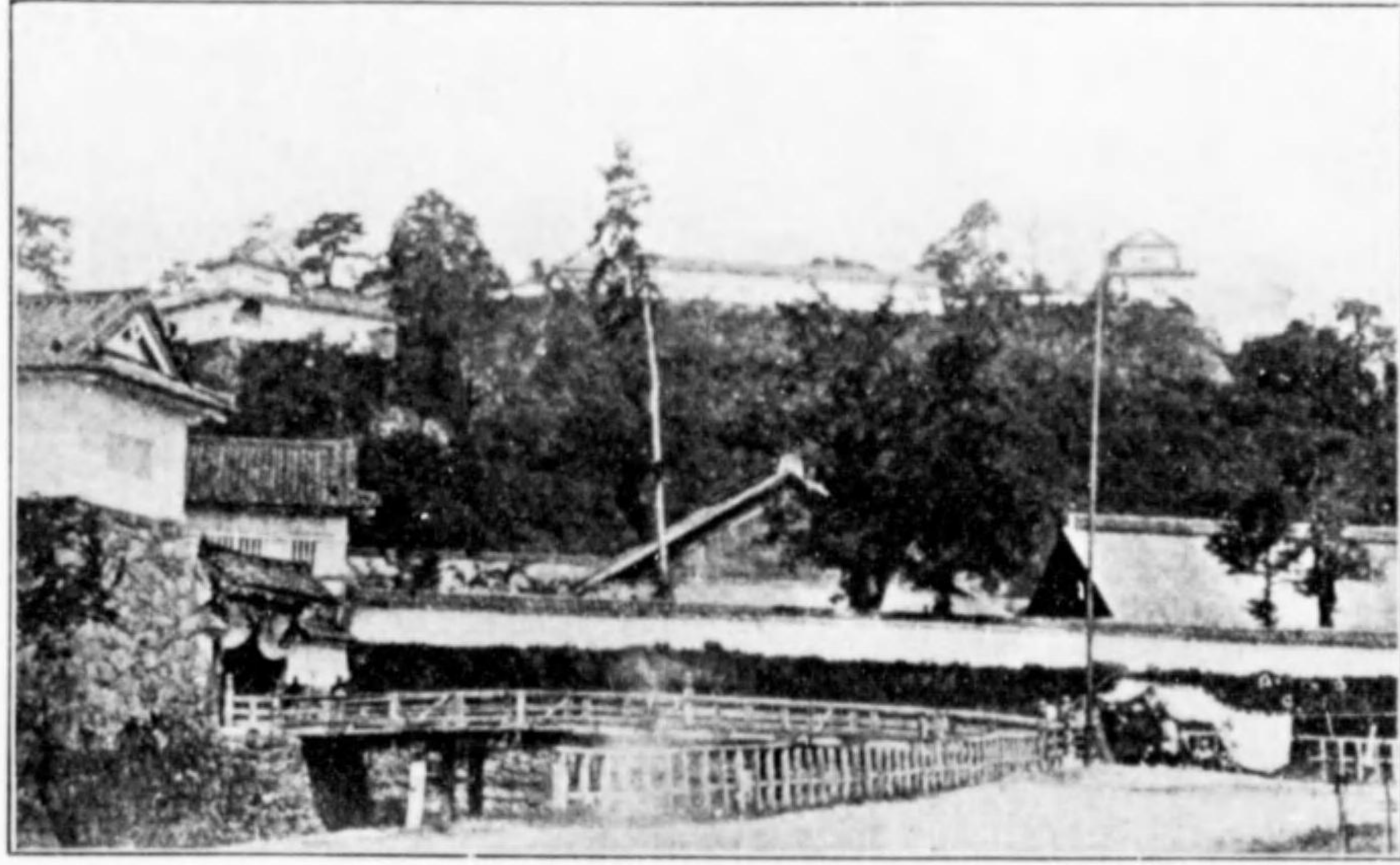
216.1  
N269W



261956

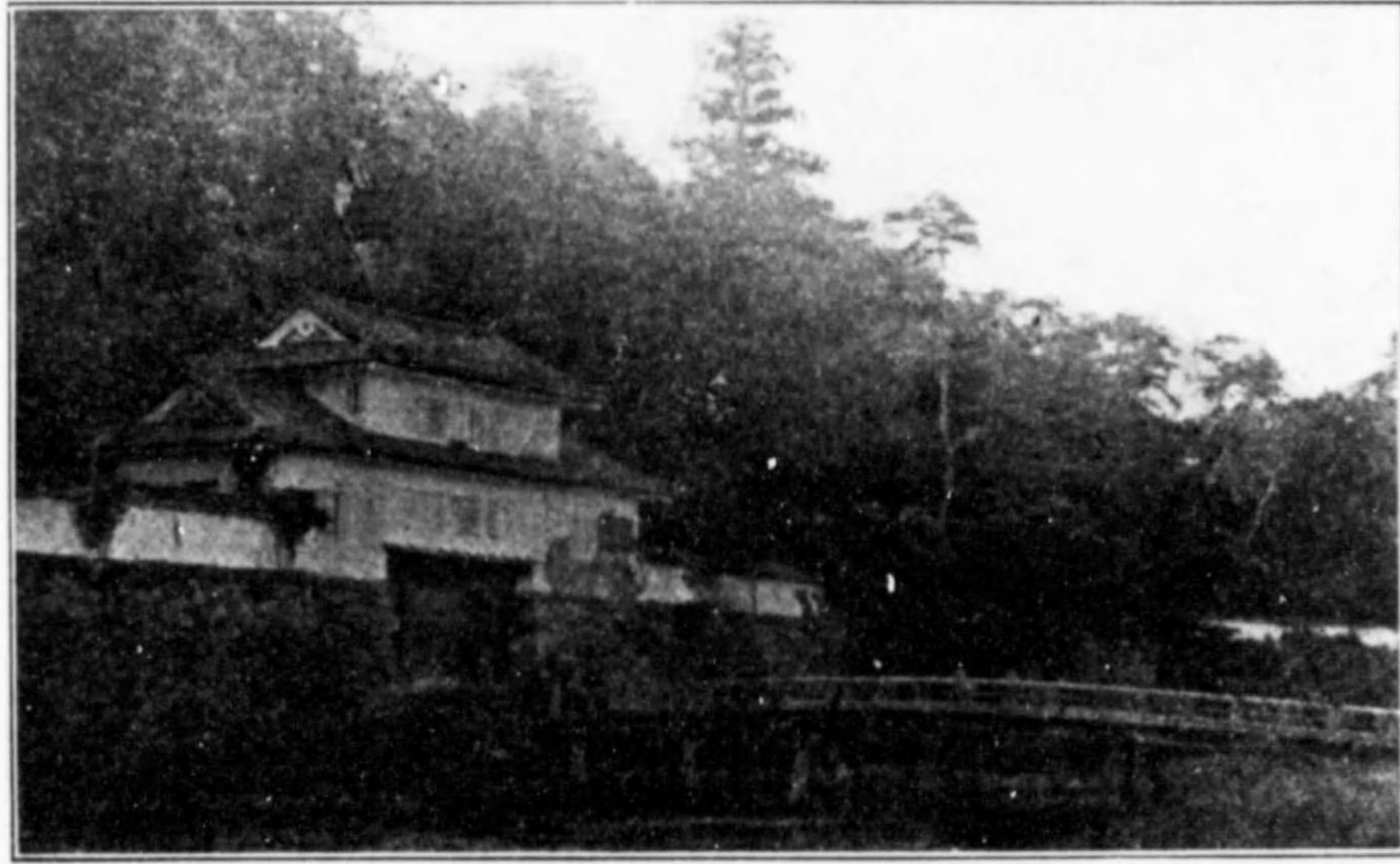
彦根城 其二

本丸東南面



表門、櫓橋及藩主居館、遠望、觀月樓、二十間樓、天主閣、天守樓。

水手黒門口



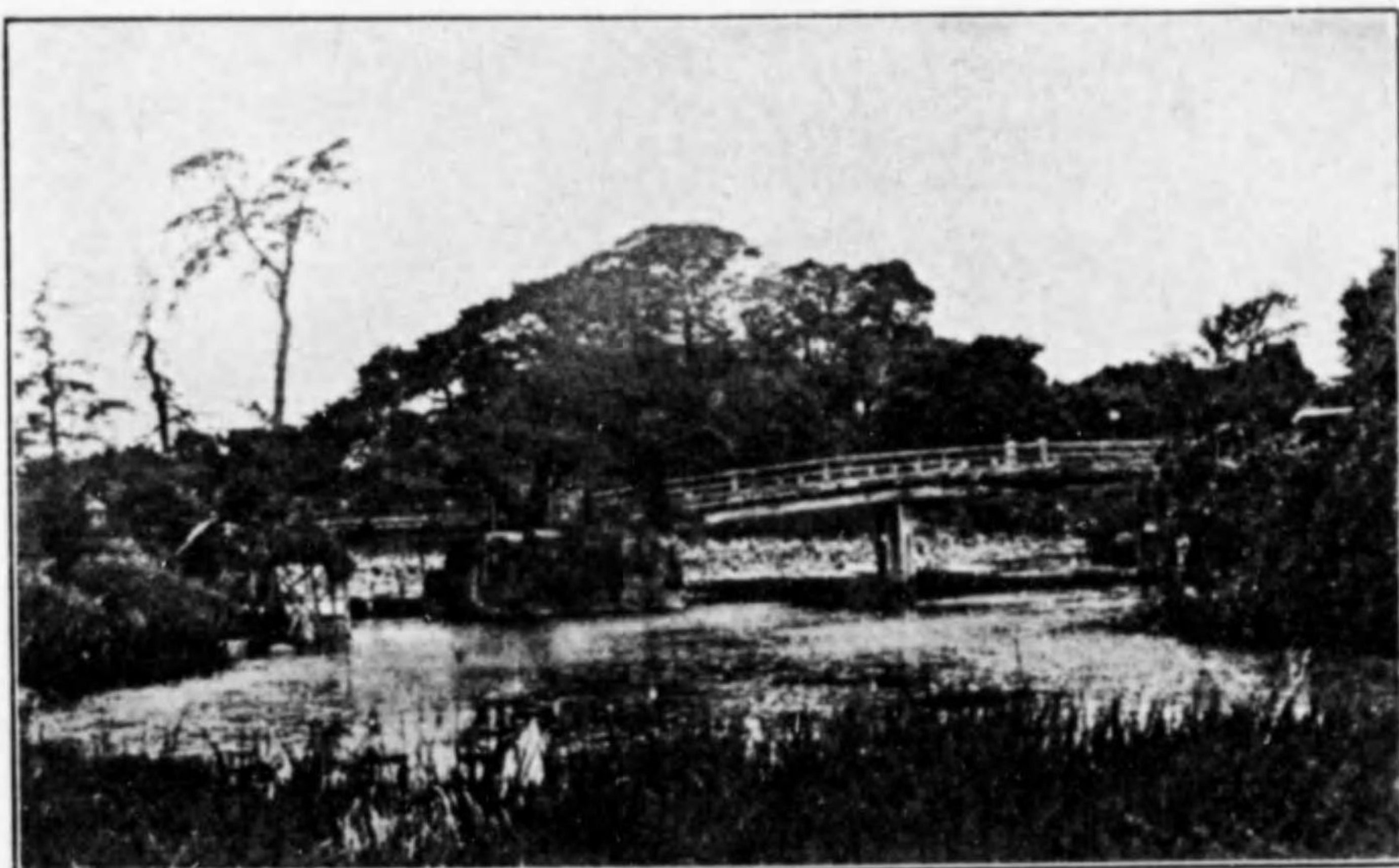
彦根城 其三

本丸東北面



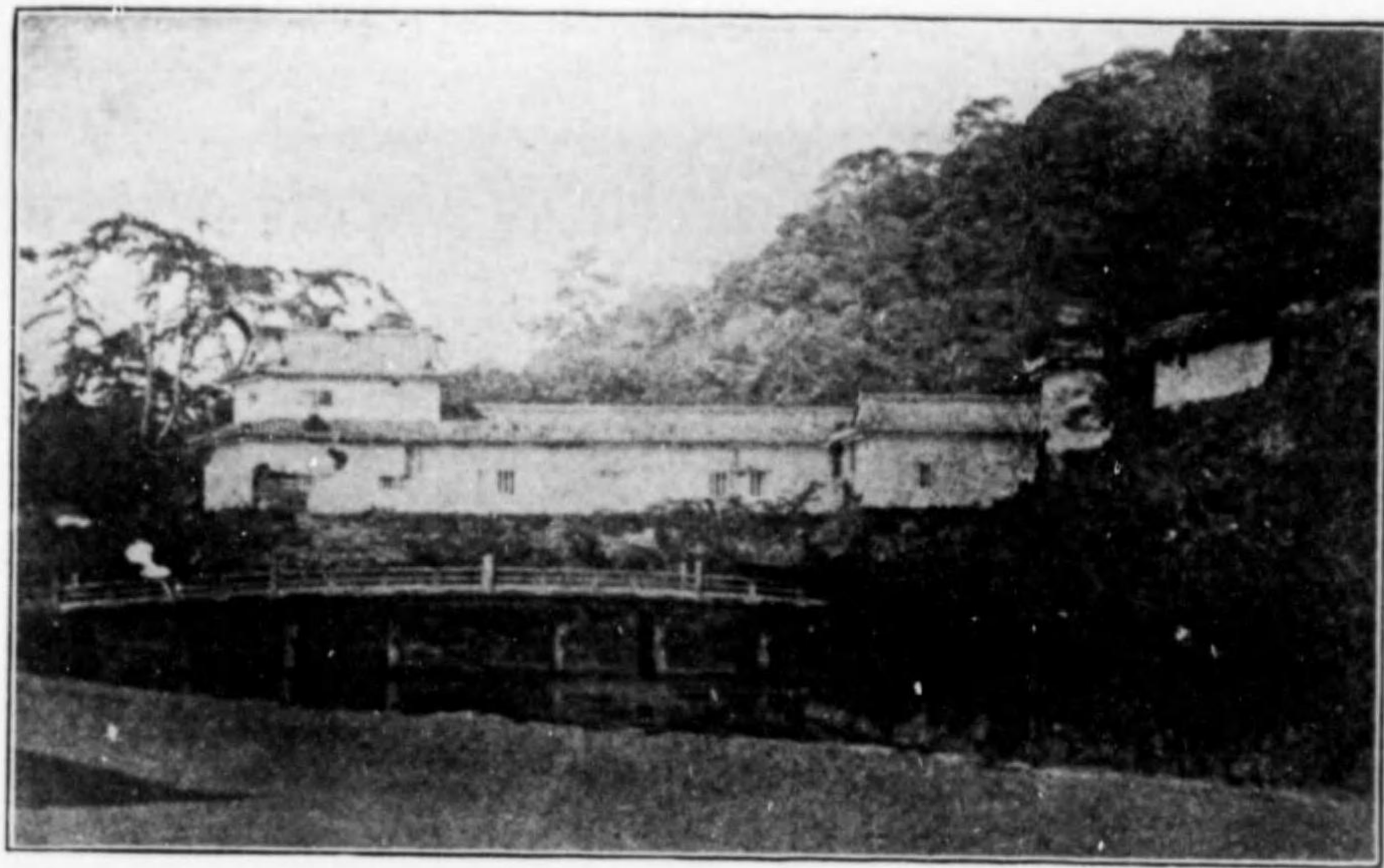
玄宮園臨池園、鳳翔臺、夫婦橋、遠望、天主閣、觀月樓

玄宮園夫婦橋

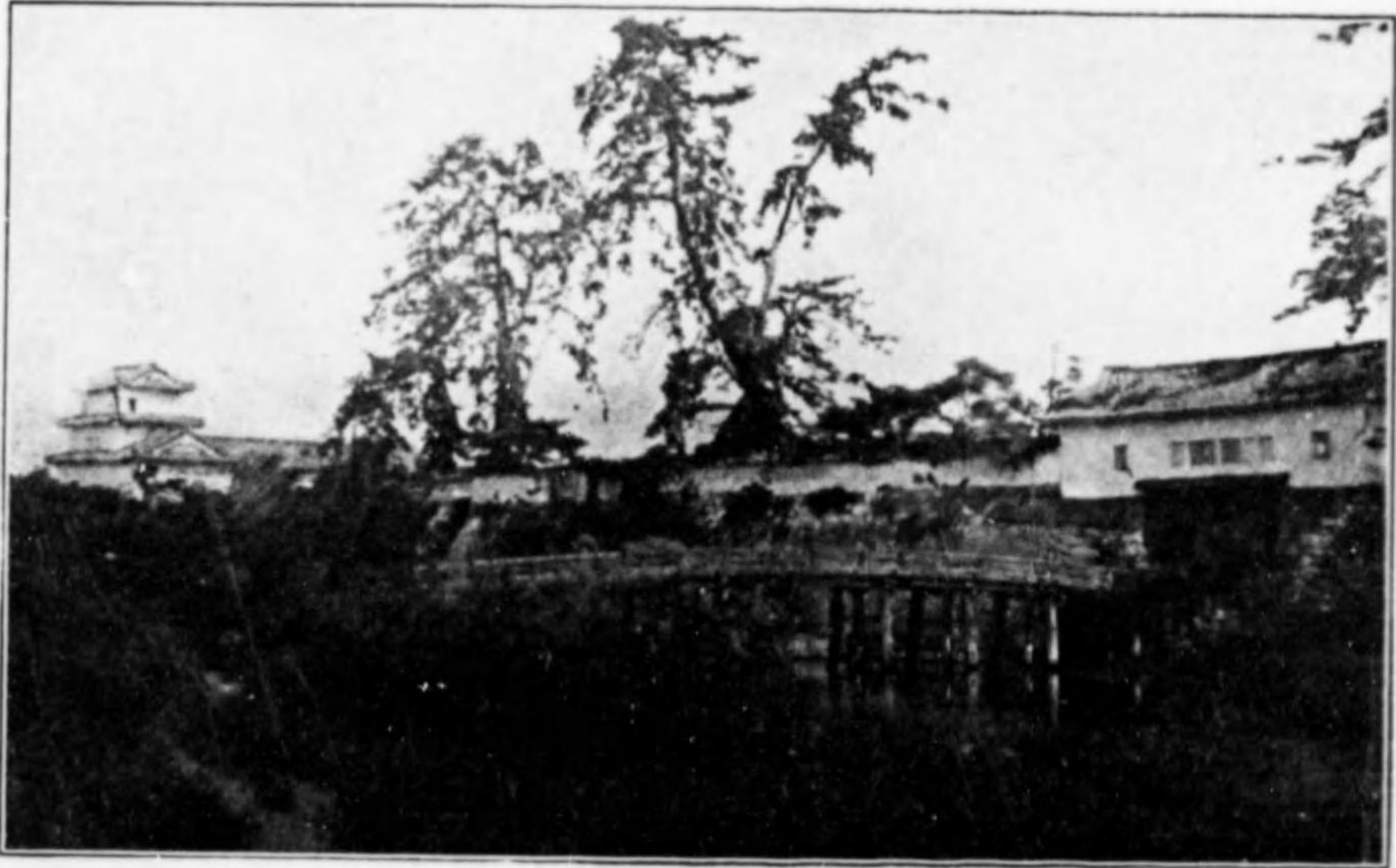


彦根城 其四

大手口

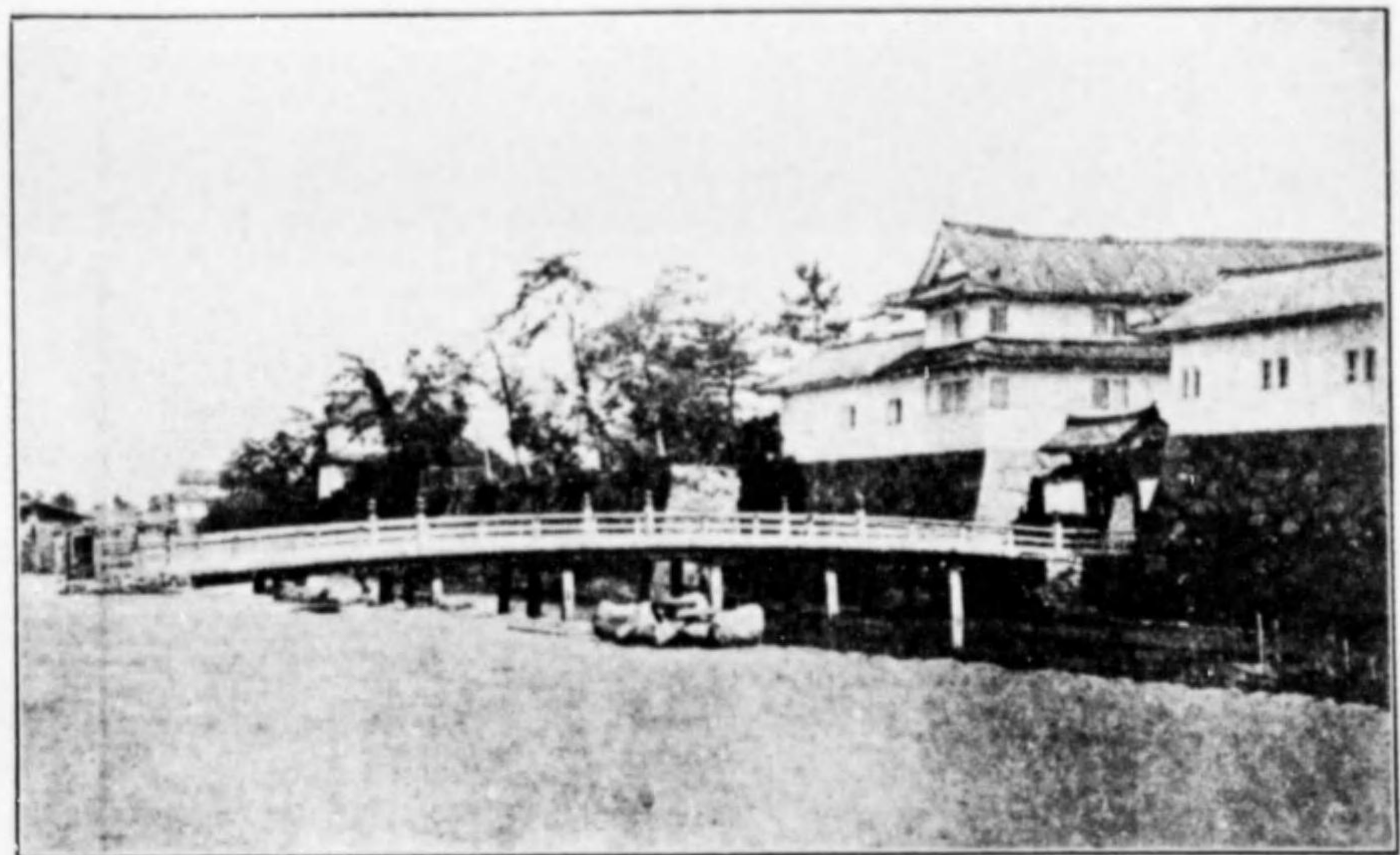


山崎口

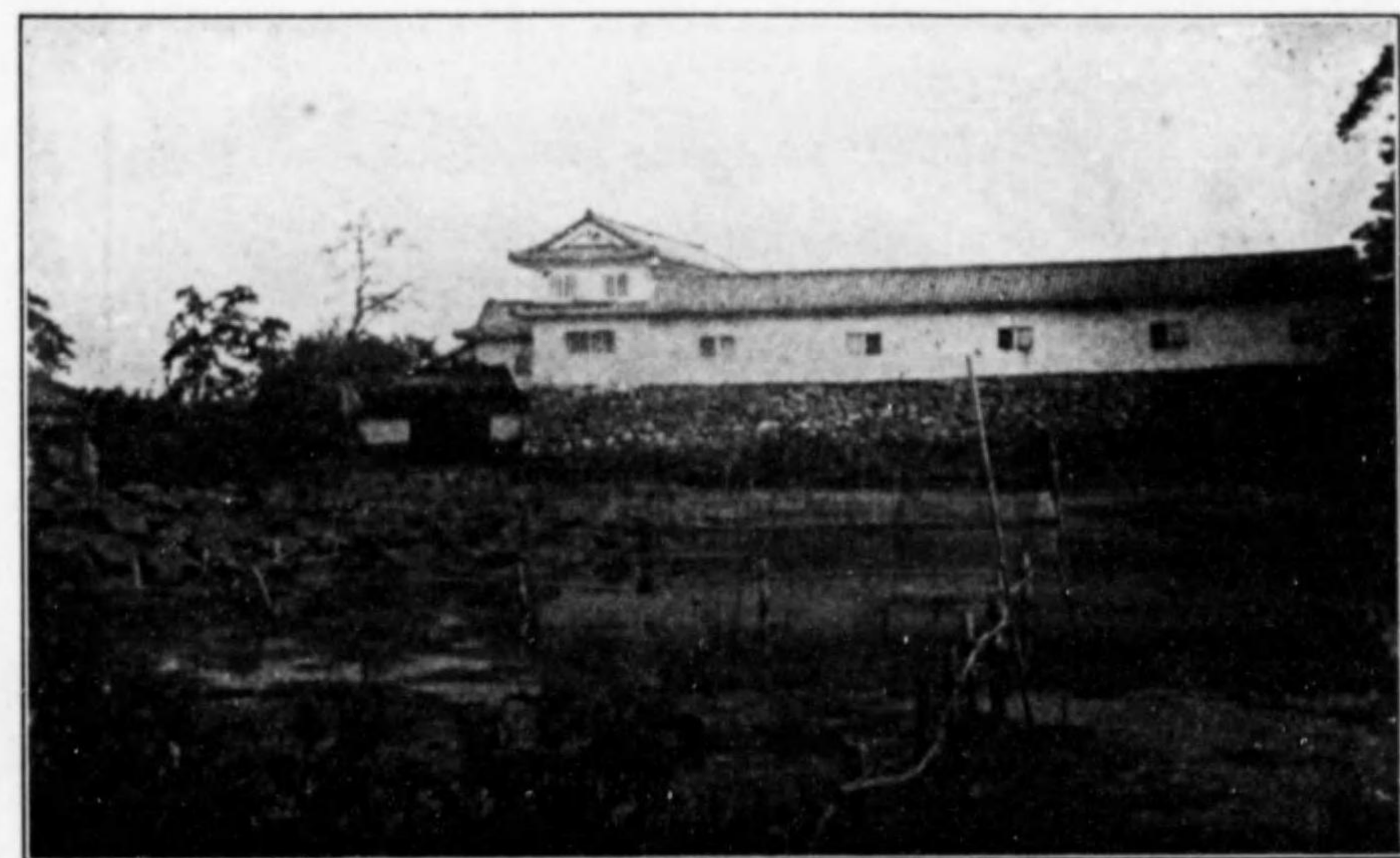


遠望、土佐郭三層樓

彦根城 其五



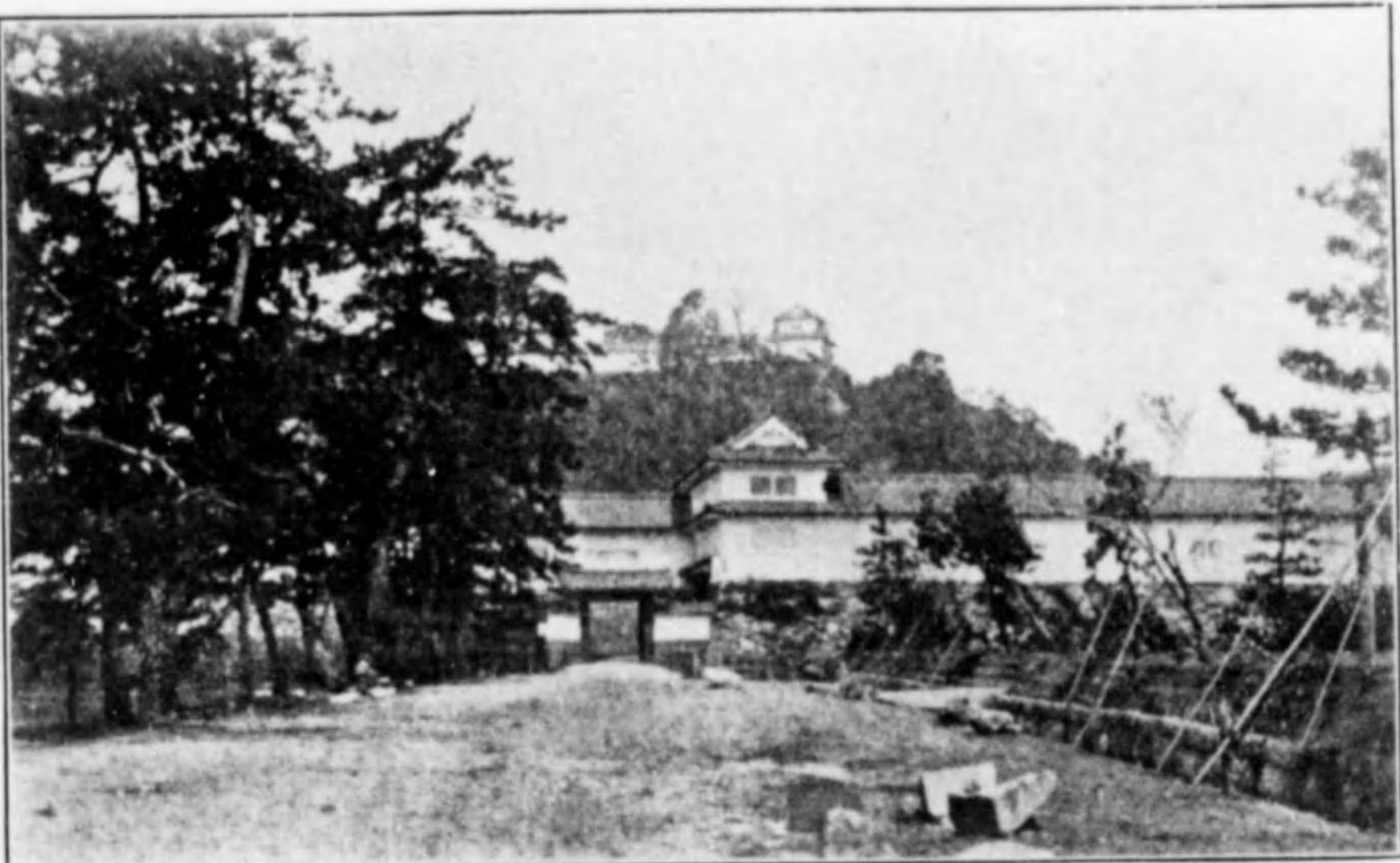
京橋口



船町口

彦根城 其六

佐和口松ノ下ヨリ望ム

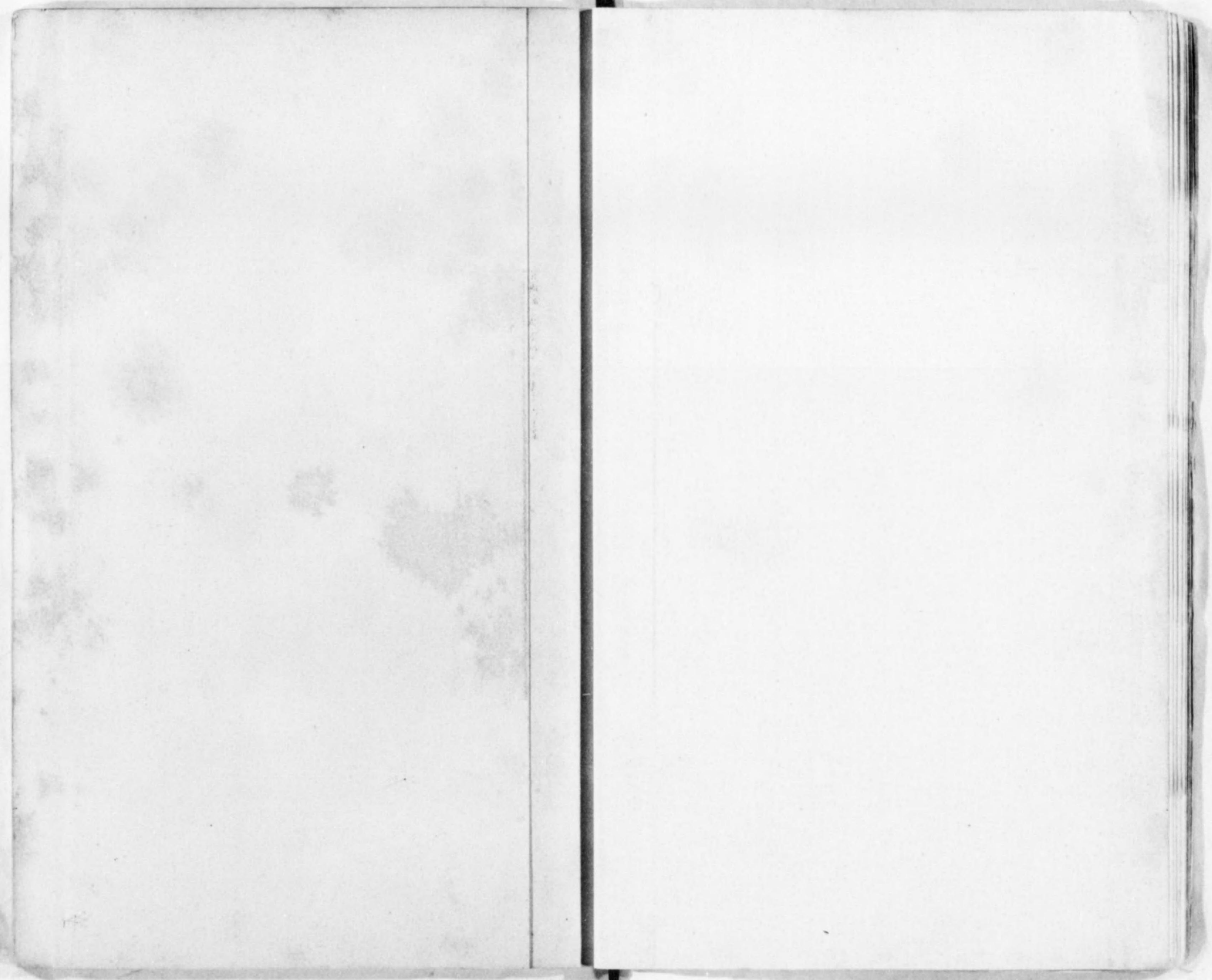


右方招魂社、左方いろは松、遠望、観月樓、二十間樓

佐和口杉ノ下ヨリ望ム

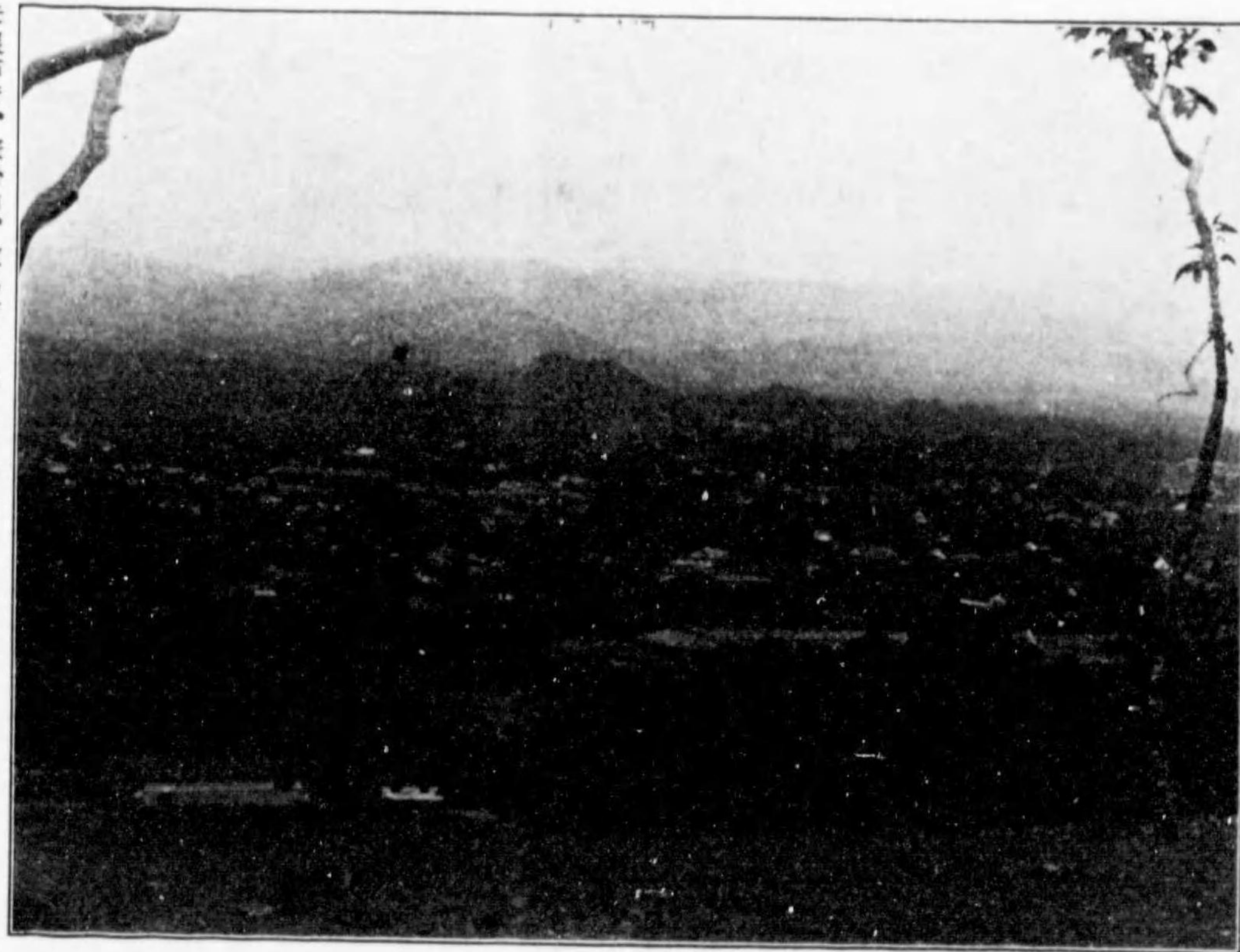


右方いろは松、遠望、天主閣、天坪樓





(1)

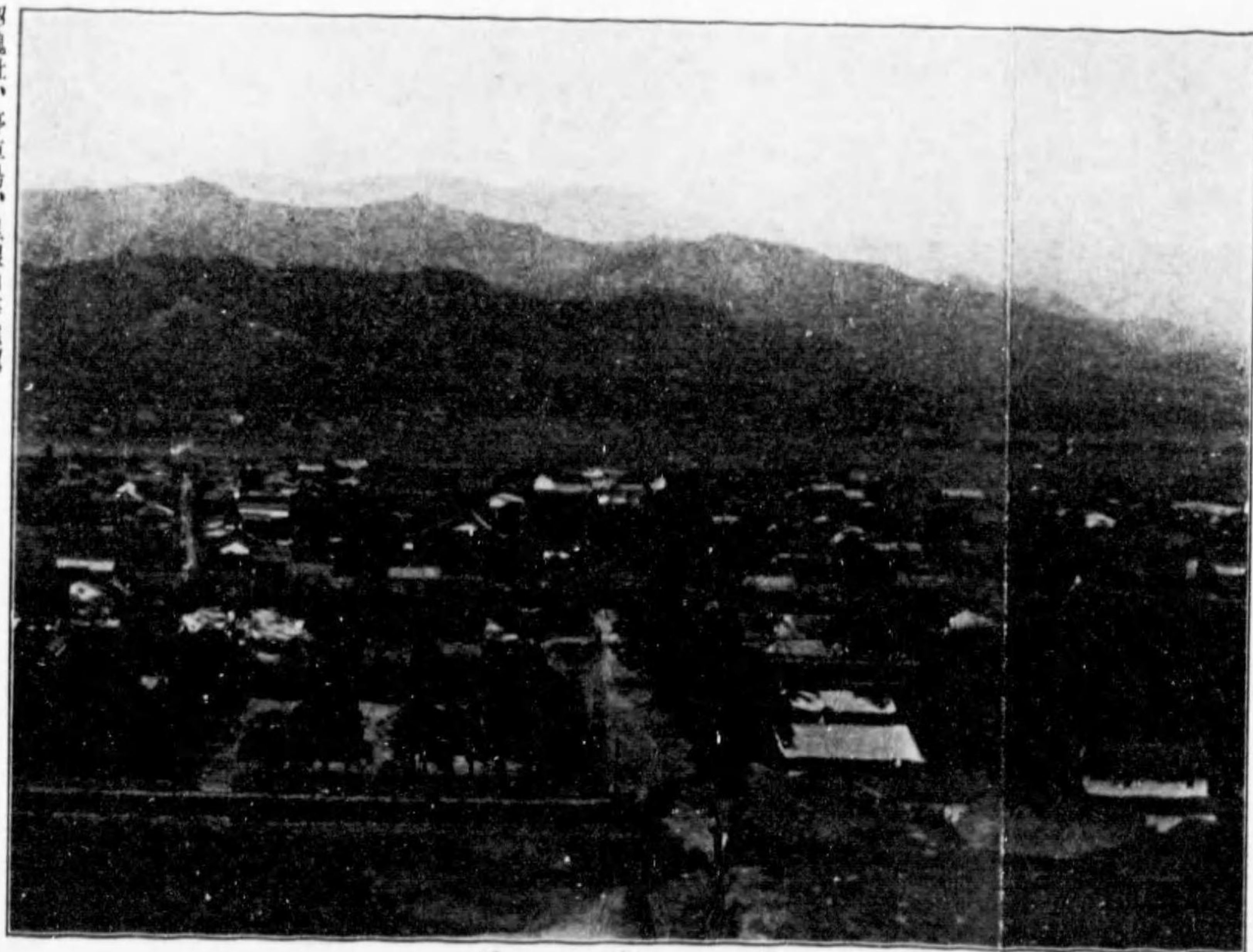


彦根城觀月樓趾眺望

彦根市街、鞍掛山、敏高寺山(麓ニ多賀神社アリ)等遠望

面 南 東

(2)



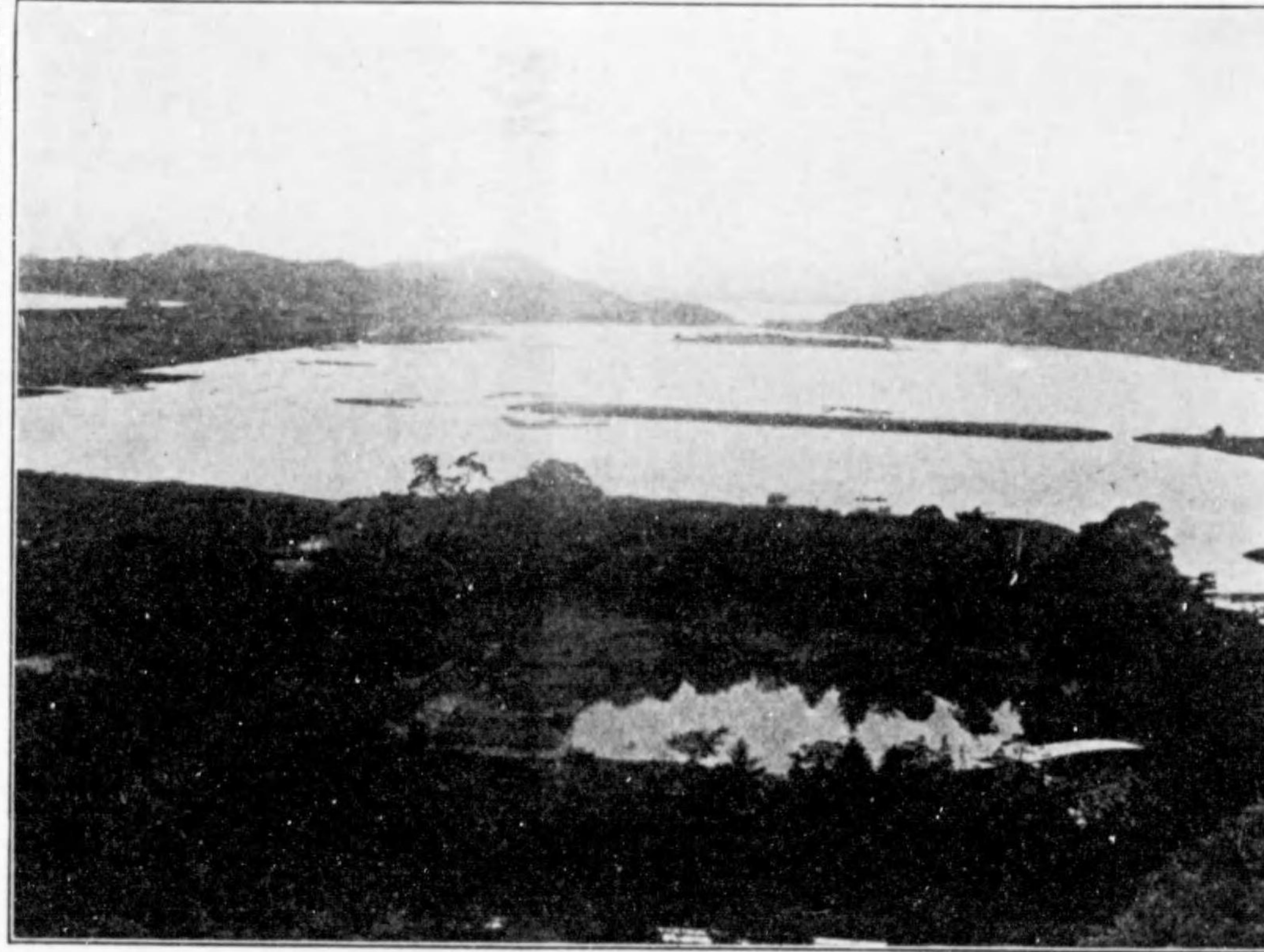
招魂社、停車場、里根山等遠望

面 南 東



舊藩主別業支宮園、堺入江(内湖)、磯山岩跡等遠望

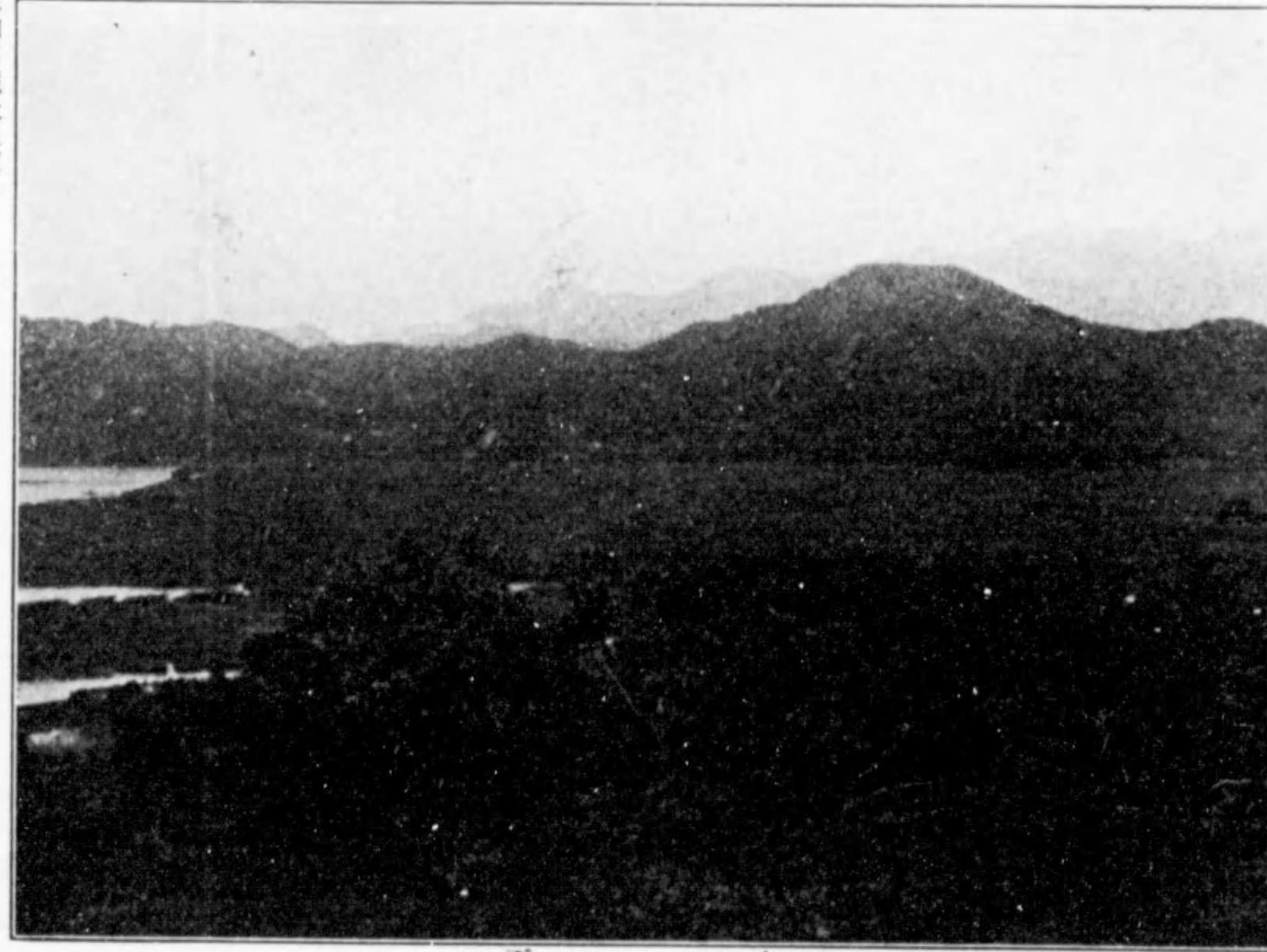
( 4 )



面 北 東

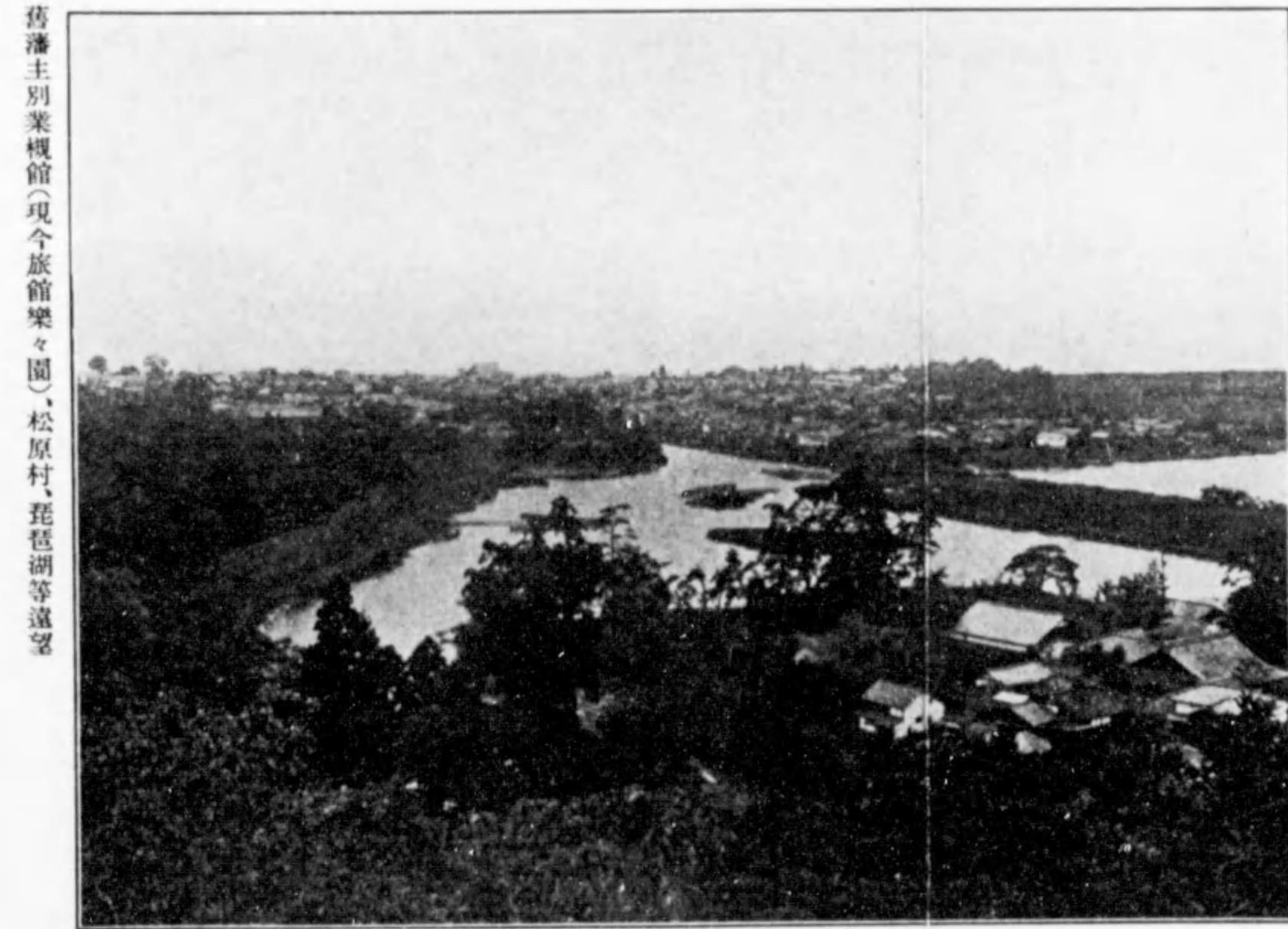
( 3 )

佐和山城跡遠望



面 東

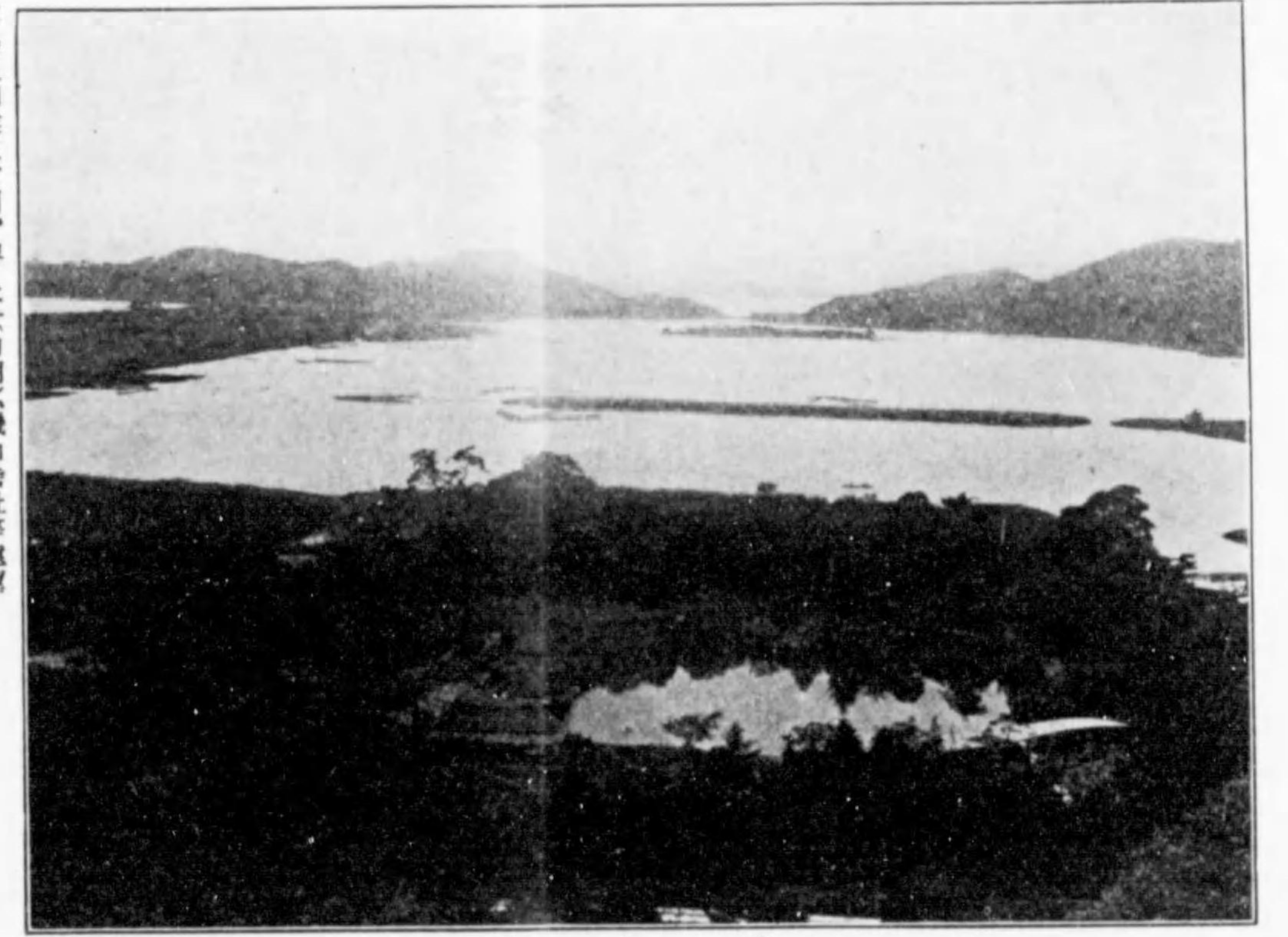
( 5 )



面 北 西

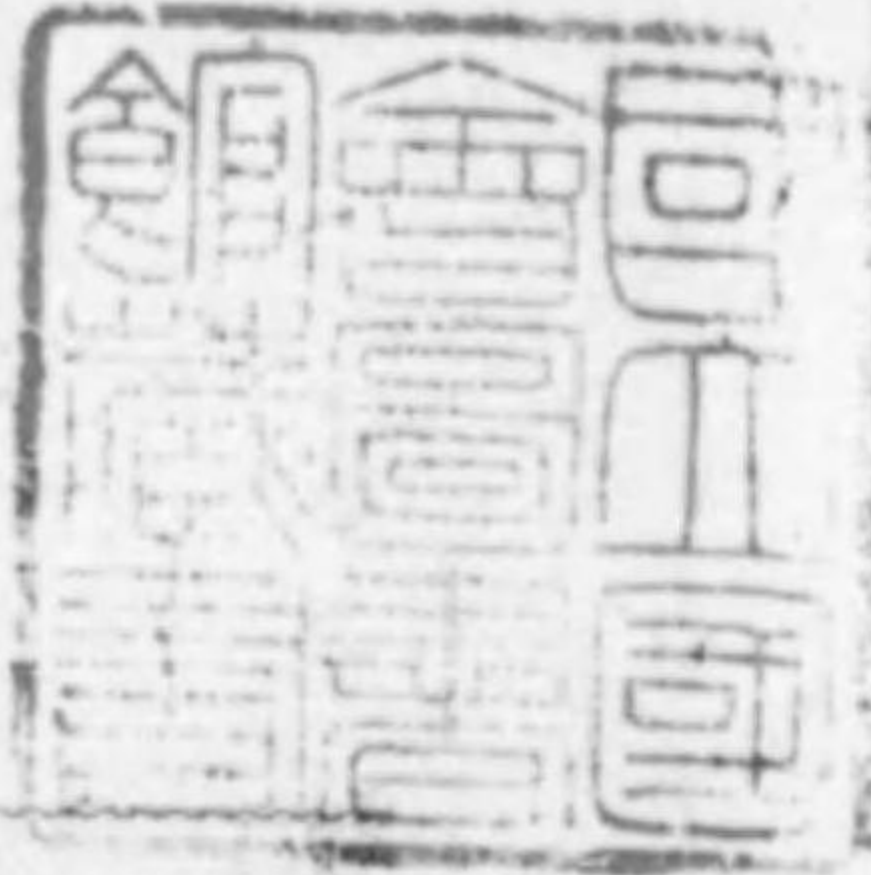
舊藩主別業榎館(現今旅館樂々園)、松原村、琵琶湖等遠望

( 4 )



面 北 東

舊藩主別業玄宮園、堺入江(内湖)、磯山岩跡等遠望



緒言

此彦根山由來記は、初め史學協會雜誌第二十六號に、水戸人小宮山綏介の於安物語に謬ある說の中に、彦根は、慶長九年に、井伊直勝創築して、其居城とするの所なれば、石田が時未だ彦根の有るべき理なし、然れば書中彦根とあるは、皆佐和山の誤なるべし、といへるは、彦根の地名を、井伊氏築城後に起れるものとの見解なるべけれど、否らず、此地名は甚古し、佐和山の地名は、古書に見えず、蓋し或は之れ有らん、予未だ之を見ず、類聚國史の缺を、後人の猥りに補ひ、二百卷の數に充たし、奉勅類聚國史と題せる寫本の第九十二卷漁獵部といふに、反正天皇三年戊申二月、令茨田真人菟近江國佐和山、得九尾狐、とあるは、何書に據りて書るにや、想ふに、夫の姦僧潮音の僞撰なる舊事大成經の若き類にて、杜撰なるべければ、佐和山と彦根とは、接續の地にして、古圖を見るに、

彦根村は、彦根山の南方に在り、佐和山は、東方に在りて、殊に接近なり、石田の従士の居邸は、佐和山のみならずして、彦根は勿論、其他近接の各地に在りしなれば、於安の父山田玄蕃は、彦根に居しなるべし、然らば彦根とあるは、謬にはあらず、今因みに、彦根の由來を略陳し、附するに愚考を以てせんとて、古書を引き、其證を舉げて、史學協會雜誌社に寄す、此は明治十八年十二月の事なりしが、翌十九年一月刊行の其雜誌二十九號に掲載せり、其後刪補校訂して、二十四年六月、東陽堂に郵送して、風俗畫報第三十一號以下に連載ありしも、少しく意に落ち居ぬ所ありて、取り消したり、尙訂正増補せまほしきも、俗事多端にして果さず、二十九年九月、吾家床上浸水の厄に會ひ、勿劇の際、衆人の手に助けられて、彼此の別な

く、當るを幸ひ、有らゆる匡籠に拾ひ納れ、二階に上げたりしが、爾後整理も懈り勝にて、經過し來りしに、三十四年、藩祖三百年祭に當り、朋友知人の訊問を受け、搜索するも見當らず、或は祕するかの嫌疑を受くるに至る、今茲三十五年五月、他書を捜さんとて、一函を開きしに、其求むる書はあらずして、匡底より此書を發見せり、因て通讀するに、誤れるもあり、足らぬもあり、更に校訂増補せんと欲するも、老懶にして、慵が先き立ち、加ふるに、去年八月より、胃病に悩まされて、臥牀に在り、大半快癒すと雖ども、未だ全く癒えず、剩さへ年來手腕の顛搖するもの一層劇しきを加へ、且へ端坐するときは、忽ち胸膈痞硬して堪へ難し、机に憑るは尙更なり、故に纔かに補正し、紙を板に狹みて、左手に捧持し、仰臥執筆して之を書

す、尙訛謬僻說多からんも、此上考覈訂正するの餘力なし、博  
雅の君子之を正さば幸ひ甚だし、時に明治三十五年五月十  
一日、六十九翁中村不能齋

四

## 彦根山由來記

彦根 中村不能齋 編  
嫡孫 勝麻呂 校

彦根山は、太古以來、活津彦根命鎮座の地にして、地名は、之に  
因るといふ、古記  
正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命、天之菩卑能命、天津日子根  
命、活津日子根命、熊野久須毘命、の五男神は、天照大御神と  
建速須佐之男命との、宇氣比の時に、成りませる神なるこ  
とは、古事記日本書紀に委しければ、就て見るべし、平田篤  
胤の古史傳八之卷十二に、天津彦根命と活津彦根命とは、

一

一神ならんかの疑ひを存せり、尙此古史傳はさらなり、本居宣長の古事記傳をも見るべし、

姓氏錄、未定雜姓に、犬上縣主天津彦根命之後也、とあり、

彦根山に、尊嶽と稱する所あり、日本武尊駐蹕の地なりといふ、古圖、

古記、

古事記に、此倭建命、○中娶近淡海之安國造之祖、意富多牟

和氣之女、布多遲比賣、生御子、稻依別王、○中稻依別王者、犬

上君、建部君等之祖、とあり、

日本書紀にも、日本武尊娶兩道入姬皇女、爲妃、生稻依別王、

○中稻依別王是犬上君武部君、凡二族之始祖也、とあり、

編者云、古圖を見るに、尊嶽は、今の西城三層樓のある邊ならんか、

元正天皇、養老四年に、○校者云、原本明治三十五年より溯りて、幾年前と

算す、即ち一千一百九十年前なり、以下皆同じ、彦根山の神地を變じて、佛宇を創す、彦根

寺門甲寺是なり、其彦根寺に安置する所の觀音は、藤原房前

大臣の守護佛にして、其像一寸八分、金の龜に乗れるより、或

は彦根山を稱して、金龜山とも曰ふは、是時よりの事なり、古記、

編者云、古圖に、彦根山麓南方に、長者屋敷と稱する地あり

て、房前公の居趾なりといふ、今仍ほ田地の字に、此名存せ

り、公卿補任、聖武天皇、神龜三年條に、參議正三位藤原朝臣

房前、月日、授刀長官、兼近江若狹按察使、とあり、續日本紀、聖武

年十二月、車駕巡幸の事を載せて、己未、○七從、横川發、到、犬上、頓宮、辛酉、○九

從、犬上發、到、蒲生郡、宿、とある、犬上頓宮は、蓋し願ふに、此長者屋敷ならんも

亦知るべからず、是は試にいふのみなり、

又云、彦根山は、古來確乎たる正稱にして、金龜山は、佛像に因りて、中世設けたる贅稱なり、云はゞ寺號に冠する爲めとやいはん、而して彦根城建築の時、既に其佛像を他に移したれば、金龜山の號は、北野寺に移りて、彦根山には消滅して、存在せず、但し其物は他に移すも、名のみ遺存する例然るを、後世の僻學者騷人輩は、其根據事蹟をも研究せずして、普通の公稱を、俚俗の如くに卑しめ、濫りに金龜山を以て妄稱し、甚しきは、町名にすら命ずるとは、沙汰の限りにして、抑何の意ぞや、濫稱とやいはん、無識とやいはん、奇怪の甚しき、卑しむべし、笑ふべし、

又云、彦根舊藩第二老、庵原助右衛門の從士に、野村新左衛門公臺といふ者あり、字は子踐、東臯と號す、明和四年、四十

五歳にして死す、此人の詩文集なる蕤園集に、金剛山聞光寺志といふ一文あり、荻生雙松徂徠を信仰の曲學者なるが故に、大義名分を知らず、依て其違犯の所に分註して、全文を録して參考に供ふ、

金剛山聞光寺、在彦根城西南中藪里、古者山曰金龜寺、曰門甲、蓋密場也、後改今宗、相傳養老四年、藤公房前、創建堂閣於本州犬上、彦根山安置觀音大士像、置二寺奉祠焉、一曰石上寺、○今云、非一寺、非也、一曰門甲寺、以彦根山一名金龜、○今云、非一寺、非也、故二寺並以金龜山號焉、號稱觀音靈場、承保寬治之間、自藤師道、僧德滿禱得靈驗也、民之奉香火者、日月以盛、乃至於寬治三年冬十二月、上皇幸焉、拜大士像、勅賜扁額、又以侍臣藤通俊、源經信所奏和歌、賜寺僧、或曰、世所稱道關西觀音靈場三十有



三、而彦根山居其一、慶長移治城之後、乃以蒲生織山代焉、或曰、非也、未詳孰然、大永三年、常陸僧文海者、詣彦根山、拜大士像、宿門甲寺、時、住持僧某年八十、與之語、大悅、厚遇之、遂推文海、住持焉、文海俗姓、結城氏、其先曰善海、名朝季、常陸、結城、朝廣之族也、別食采邑、承久三年、上皇謀討北條氏、北條氏遣結城、三浦、足利、武田、小笠原諸將、將兵伐京、○今云當朝季曰、普天率土、誰非王臣、以臣抗君、不可從也、乃逃為釋氏、聞親鸞上人、謫在越後、往師事之、更名善海、時年三十有三、奉上人教、夙夜毋怠、迨至上人、遇赦還京、善海乃還常陸、居十五年、如京省、觀上人、上人賜其肖像、彌陀名號、幢、及諸物、善海攜歸寶藏焉、傳十一世、而至文海、文海之移住門甲寺也、大喜曰、常州地、去京甚遠、無由歲時拜謁高祖塔、今則可中宿至焉、欣然齋所寶

藏以來、徙、遂改為教寺、山下、中藪、里有優婆塞、甚、歸依文海、信奉其教、遂請移寺於中藪之地、永祿、天正之間、數罹兵火、而扁額及親鸞上人所賜、僅存耳、豐王、○今云當封石田三成於澤山也、○今云當彦根中藪、皆在其封內、慶長五年、三成作亂、神祖征之、軍於美濃、在赤坂勝山、時門甲寺主僧性海、贊乾栗詣謁焉、神祖悅、賜以扇、兩面畫三葵葉、蓋服御之物也、○今云當御之物、當○今云當神祖賜祥壽公故、三成地、封于澤山、雲光公時、廢澤山城、改城、彦根山、於是移觀音閣於山西南白山、祠側、即今之北野寺地也、久昌公時、造菅相廟於觀音閣側、召後閑、北野寺住僧某、後閑地名居石上寺、奉祠焉、因改號北野寺、而山仍舊號金龜、於是性海乃自改號山金剛寺、聞光云、白山祠、原隸門甲寺、至是亦遂并隸北野寺、中藪有供田若干、相

傳爲供白山歲時祭祀之料者、至今除其田、專歲入聞光寺、例  
聞光寺住持僧與里父老、以歲時爲酒食會一日、而後里中乃  
得行息民會食、至今爲故事弗改也、初親鸞之後世、分爲東西  
二派、聞光寺乃屬西派、至延寶中住持僧名宗海、有故轉東派、  
西門徒有勢力者多沮之、宗海大爲窘、時木股淨閑爲政、長壽  
公命淨閑令祠曹董其事、遣願通寺主僧某爲之行事、遂得轉  
派焉、東門乃領賜聞光寺親鸞及琢如上人眞影、是時往復書  
疏、今現存云、今住持僧周山具記懇請公臺潤色寺志、且諸所  
寶藏扁額幃扇諸物、一一視之、公臺觀記所載金龜山事、與世  
傳者老之言大有異同、以文獻不足、事無可徵、故未遑考定、其  
是非得失也、姑就記文潤色以與云爾、

此山上西北の方を、長尾山と曰ふ、古圖を見るに、今の出郭、こゝに  
觀音臺と唱ふる邊なり、

丈餘の白石あり、其光輝世に稀にして、日月の光に輝き、湖に  
映じて、漁獵の妨害となれるより、土民掘り出して、更に之を  
埋め、其上に佛寺を建て、名づけて石上寺と曰ふと云ふ、古圖、  
堀河天皇、寛治三年、八百二  
十二月二十二日、白河太上天皇、王  
公卿相を引率して、近江國犬上西郡彦根山西寺に參入し給  
ふ、古圖を見るに、御幸道といふ  
あり、今の順禮街道に當る、凡そ洛下の貴賤、海内の縑素、男女老  
少と無く、皆以て參拜す、扶桑略記、百鍊  
鈔、中古記、古圖、

扶桑略記、白河天皇、承曆三年條に、西寺驗記を引て云、同年  
攝津國水田郡石良里、有沙門德滿者、上野延末之子也、生年  
二十歲、兩眼忽盲、經三年、參鞍馬寺祈禱、無驗、從寺出、參籠  
長谷寺祈請、至第七日、夢見自御帳中、老僧出來云、我力不及、  
汝當往近江國犬上西郡彦根山西寺觀音靈驗之處、致誠祈

願三日之內各可有驗夢覺以後出長谷寺三月九日參著彦  
根山西寺泣致祈願至第三日戌刻兩眼忽開始見佛前燈明  
件僧今住彼寺常修長講

同書堀河天皇寬治三年條に十一月廿八日甲午内大臣藤  
原朝臣師通參詣近江國犬上西郡彦根山西寺觀音靈驗天  
下無雙之地也内府頃年耳根頗不聰利然被參件寺以後其  
恙忽痊仍爲賽宿禱十二月十日丙午重詣同寺三日間參  
籠十五日辛亥攝政從一位藤原朝臣并左大臣源朝臣同  
車參詣於彦根寺廿二日戊午太上（白河）天皇引率王公卿相等  
參入同寺凡洛下貴賤海内縑素男女老少皆以參拜凌寒風  
而飛於輕車侵甚雪而策於正馬或觀音入夢延天齡於遐年  
或菩薩出驗得人望於斯須

百鍊鈔堀河天皇寬治三年條に十二月廿一日太上（白河）皇參彦  
根寺給近日天下貴賤傾首參詣利生可限歲内云々但爲天  
狗所爲之由世人稱之改年之後無參詣之人  
中右記堀河天皇寬治三年十二月條に十五日攝政（師實）殿令參  
詣近江國彦根寺給云々廿三日太上（白河）皇令參御彦根前齋  
宮同參御從今夜内御佛名三个夜第二御導師明胤阿闍梨  
雖當年三會當講被請也院御物詣御共（藤實季）按察大納言  
源大納言（源俊明）治部卿皇后宮權大夫宰相中將（藤經實）二位中  
將殿上人十八人云々廿一日出京依欠日夜前出御東  
三條廿二日參着御經供養導師隆命法印廿四日未時  
許入洛近江國司爲家朝臣有御儲事兩所云々凡今年京  
中上下多以參詣此寺予具申中納言殿參詣也觀音靈驗

以今年爲徽云々、是世間之説、人々致信、編者云、徽は微の誤にて、微アリト爲ヌとの意な

大日本史、白河天皇本紀末に、寛治三年十二月、幸近江彦根か、らん

西寺扶桑略記、百鍊鈔、禮觀音像扶桑略記

同書、堀河天皇本紀、寛治三年に、十二月二十二日戊午、上皇百河

幸近江彦根山西寺、民間浮言、西寺觀音靈驗、限于是年、都鄙

人士群集、中右記、百鍊鈔、西寺據扶桑略、作二十一日、二十四日庚申、上皇還宮、

中右記

編者云、犬上西郡といふは、彦根山は、犬上郡の西端湖邊にあるが故ならん、又彦根山西寺とは、古圖を見るに、門甲寺は東にあり、彦根寺は西にあり、西寺とは、蓋し彦根寺を指せるならん、

慶長五年三百年前九月、關原役終りて、其十月十五日、徳川家康大坂に在り、井伊直政の戦功を賞し、六萬石を加へ、近江十五萬石、舊封上野三萬石通前十八萬石、及び敵將石田三成の所據たりし佐和山城を授與す、三百年前正月、直政、上野群馬郡高崎城より移り、焼餘を修して、此に居る、乃ち詠じて曰く、祈るぞよ子の子の末の末までも護れ、近江の國つ神々、今の佐和山神社創建の時、護國殿と稱せしは、此歌詞を取れるなり尋て佐和山の西、磯山に移し、築かんと欲して、果さず、是冬、去年關原の傷痕再發して、七年三百年前二月朔日、陽曆三月二十四日佐和山城に卒す、年四十二、嫡男直繼、後に直勝と改む嗣く、年尙幼、十三なり、諸老士、直政の遺意を承け、相謀りて移築の方略を畫し、磯山を改めて彦根山とし、家康の旨を請ふ、即ち聽許して、奉行を差し向けらる、其人は、

山城宮内少輔忠久 佐久間河内守政實

犬塚平右衛門

役夫は、伊賀、伊勢、尾張、美濃、飛驒、若狹、越前の七國十二大名に  
賦課せらる、其大名は、

伊賀上野 筒井伊賀守定次

伊勢桑名 本多中務少輔忠勝

同 津 富田信濃守信高

同 龜山 松平下總守忠匡

同 神邊 一柳監物直盛

尾張清須 松平薩摩守忠吉

同 犬山 平岩主計頭親吉

美濃大垣 石川長門守康通

同 加納 奥平美作守信昌

飛驒高山 金森出雲守可重

若狹小濱 京極若狹守高次

越前北之庄後改福井 結城中納言秀康

八年、三百零八年前土木の工を起す、八月、直孝藩士に書を興ふ、

態令啓述候、仍其以來、無音失本意候、然其地御普請ニ、  
萬端御苦勞共、令推察候、隨而勘解由致成敗付而、從右近様、  
御折檻被成候、拙者若輩故、不伺御意候而、指當令迷惑候、此  
上之儀も、不及是非次第共候間、各頼入存候條、可然様御取  
成候て、右近様御機嫌被宥候様被成候て、可給候、委々清兵  
衛可申候條、不能詳候、恐々謹言、

井伊掃部佐

八月廿日

犬塚三十郎殿

人々御中

直孝花押

一六

文中、其地御普請とは、築城工事なり、時に直孝十四歳、未だ叙位任官  
るべしと稱す、兄直繼も任官前、既に起工したるを見るに足る、是歲、  
右近と稱す、蓋し其例ならん、既に移る、十年、三百零  
鐘郭成りて、九年、七百零、春、佐和山城より、此に移る、十年、三百零  
六月、本多忠勝より、吾藩士に書を與ふ、乃ち助役大名中、自身  
見廻りし人あるを見るべし、其文に曰く、

今度は參候處、右近大夫殿、種々御馳走、殊御祕藏之御腰物  
被下、誠泊へ迄、被入御念、重疊御懇意之儀共、忝共御禮難申  
盡候、可然様御意得候て可給候、隨而貴殿、色々御馳走、殊更  
遠路御送り迎、旁畏悦此事候、將又其地御普請場、一段見事

候所まで候、併大滄之御普請にて、御家中衆、不<sub>レ</sub>大形、御苦勞  
するべきと存事候、猶重而可<sub>レ</sub>申入候間、不能具候、恐々謹言、

本多中務

六月十日

忠勝花押

宇津木勝三郎殿

御宿所

七月、徳川秀忠、小澤瀨兵衛を使として、書を直繼に賜ひて、土  
木工事を勞せしむ、其文に曰く、

彦根山普請之様子、聞届度候而、差上、小澤瀨兵衛候、炎天之  
時分、苦勞共候、彌可<sub>レ</sub>入精候段、肝要候也、

七月十日 花押

井伊右近大夫殿

一七

十一年、三百零五年前牙城天守樓成る、三百零四年前十一月、忠勝亦書を吾藩士に與ふ、但し文中なる、兵ア少は、直繼の事なり、正五位下右近衛將監より、十一年五月十三日、從四位下、兵部少輔に加階遷任す、其元御普請は、築城工事なり、

尙々、遠路思召寄珍敷物送給、一入忝候、我等事、去年より、眼病氣ニ候て、于今透共無之候故、兵ア少殿へも、御見舞をも不申候、右之分ニ御座候間、めりすこ、判形不罷成候間、印判を以申候、可被成御免候、以上、

遠路被入御念預御狀、殊爰元珍敷生成鮎鮎一桶送給候、御懇志之至、別而忝存候、其以後も、久以書狀も不申、無沙汰申候、其元御普請、無御油斷之由、御苦勞共候、いづぞ御手透之時分、少々御光儀奉待候、此方御用等候、可承候、何様從是

可申入候間、早々令申候、恐々謹言、

本多中務

三月七日

忠勝花押

三浦十左衛門殿

御返報

城郭未だ全からず、直繼痼疾ありて、軍國の務めに堪へず、十九年二百九十冬、大坂役起るや、家康命じて、庶弟直孝の、大番頭にして、伏見城番たるを起して、兄直繼に代り、彦根人衆を引率して、軍に従はしむ、翌元和元年二百九十二月、遂に直孝をして、直ちに亡父直政の後たらしめ、彦根城十五萬石の主とし、直繼をして、上野安中城三萬石の主とし、分家たらしむ、五月六日七日、直孝戦功あり、十三日、五萬石を加賜し、通前二十萬

石を領せしむ、明年、二百九十更に役を起し、八年、二百八十に至りて、城郭及び士民の邸宅略成る、

創築の時、祿十八萬石、元和元年に、二十萬石、三年に、二十五萬石、寛永十年に、三十萬石に至るといへども、纔かに外郭を増すのみ、故に櫓樓、墮壘等、都て十八萬石の規模を以て築けるものなり、

初め此に築くや、往時の寺門を、舊に依りて、存するものあり、相傳ふ、白河天皇通御の舊を存すと、即ち牙城の樓門是なり、舊時は報時鼓を此に置く、故に太鼓櫓と曰ふ、今報時鐘のある側の門なり、

此門柱には、釘孔數多あり、廻國順禮の、札懸の釘穴なりといふ、

天守樓は、三層にて、六間に十間半、同所へ付たる多間は、二間に十四間、同方に六間、同所文庫は、二間に二十京極高次大津城の天守なり、家康

の命に依りて、移轉し、大工棟梁濱野喜兵衛恰好して之を建つ、其石壁は、外見のあしきに拘はらず、専ら實要を主とす、之を、牛房積といふ、

西城三層樓は、四間に五間、北の取付多間は、三間に七間、新に之を造立す、○校者云、西城三層樓に就きて、編者の追考あり、卷末追加の部に載す、又今は撤壞して無けれど、山崎より尙西北端に出たる別郭、初め木俣土佐此に居る、因て土佐郭と稱せり、此に三層樓あり、長濱の天守樓を、移築したるなり、此城郭の三層樓は、天守樓、西城樓と、此との三樓のみ、表門に、一層樓一个所あり、其他は皆二層樓なり、

天坪樓門は、此樓門は、門を中央にし、左右に二層樓ありて、兩々相對し、宛かは、城上の空際に架する橋にして、橋上に屋を作りて、雨露を避く、其狀廊廡の如し、故に稱す、但し今は其屋は撤して無し、羽柴秀吉の創



築にして、内藤豊前守信成の舊城、本國坂田郡長濱城の樓門  
なり、此門皆樟材を以て建築せり、  
城郭總ての石壁は、本國大津安土、佐和山、長濱、四舊城の石壁  
を用ゐて築く、

城樓總ての瓦は、本國東淺井郡小谷山の土を用ゐて之を製  
造す、大手櫓樓の瓦に、下り藤丸、即ち内藤家の紋ありしを、編  
者確かに記憶す、乃ち古瓦をも用ゐ、其不足を、小谷土を以て  
造れるなり、

藩士にして、土木工事に係りしは、

繩張

横地修理吉晴

石原主膳吉次

孕石源右衛門泰時

普請奉行

早川彌摠左衛門幸豊

富上喜太夫

伴加右衛門

加藤金左衛門

宇津木新九郎

横内彌左衛門

濱野喜兵衛

作事奉行

大工棟梁

再役には、

總奉行

奥山六左衛門

大鳥居玄蕃

植田長左衛門

佐成三郎左衛門

普請奉行

谷口八郎兵衛

作事奉行

壺野左近右衛門

竹中清太夫

門屋猪右衛門

早川彌摠左衛門は、武田信玄の從士、早川豊後守の子にして、豊後は、馬場美濃守信房の門人、美濃は、山本勘介の門人なり、城取の法は、城取とは築城の俗言なり、山本勘介流と稱して、相傳す、彌摠左衛門は、城取の法に巧みなるが故に、家康、彌摠左衛門に命ずるに、彌摠左衛門、末代迄の城郭、所詮自分の及ぶ所にあらず、と辭すれども、甲州城取の法、其方ならではとて、聽るされず、終に命を拜して、繩張せり、故に總て此城は、信濃國川中島城の繩張に、酷だ似たりといふ、○校者云、此は傳説なれど、川中島城鐘郭繩張は、城中第一の出来にて、縦ひ京橋門より、敵何程押

寄せ來るも、容易に破らせじ、天下無雙の要害なり、と早川常々自負せりといふ、○校者云、此郭には、京橋門に向へる方に、

初め報時鐘を此に置く、故に稱す、然るに鐘聲城下北隅に達せず、依て鐘を牙城樓門外即ち今ある所に移す、然れども稱呼は、舊に依りて改めず、人或は即今報時鐘の在る所を、誤認して鐘郭と爲す、故に一言して、之を辨ずると爾り、

西城空陸の北西の出郭を、人質郭と稱す、籠城の時、任子を入るゝの所とす、俗に觀音臺と稱す、往時は社地にして、産土神ありしといふ、即ち長尾山なり、此山下を、腰曲輪と稱す、道路二あり、一は大手門に行くもの、一は水道郭に行くもの、立藩中は、諸人は勿論、士といへども、猥りに通行を許さず、山の西北端を、山崎と稱す、此處の岩切は、藩士の勞力に成りしとい

ふ、此山上には、箭筈竹を植ゑて、軍用に供す、  
大手橋を入りて、西北に行くに、凡そ一町許にして、登山の坂  
口あり、坂を登らずして、山麓に沿ひて、尙西北に行くと二十  
間許にして、少し山の出張りたる所の麓に、直經一間許、圓形に  
石もて積みたる溜池あり、御手洗と稱す、往昔此山の觀音に、  
參拜する者の、手洗水なりといふ、此溜池の側に、地藏佛の像  
を彫りたる小石數個あり、此は山中所々に散置せるを、築城  
の時、取り集めて、此に置けるなりといふ、立藩中は、金龜山彦  
根寺を移せる、金龜山北野寺の住職、毎年正五九月の十八日  
には、此處に來りて、讀經するの例なりしが、廢藩後、陸軍省の  
所轄にて、人民の入城を制禁中は、寺内にて之を勤行し、諸人  
の入城を許されし以後は、舊に復して、之を勤むと聞く、尙山

麓を西北に行きし所、往時鈴木主馬此に居る、故に主馬郭と  
稱す、後此に米稟を建て、此を御用米藏と稱す、即ち城附預り  
米、五萬石を此に納む、扱彦根市街、今の連着町、四辻、南西の小  
稱中に、直徑一尺計、圓形の石頭見ゆ今は見えず、或は云、折れ  
たりと其實否を知らず、此は  
往昔順禮道の石なりといふ、顧ふに或は道標などにて、文字  
の彫刻あらんも知るべからず、折もあらば、堀り出して、點檢  
せまほしきとにこそ、又今の池須町通り以南を、順禮街道と  
いふも、亦其往還なるが故なりといふ、

城山に、樹木の鬱生繁茂して、城内の洞見せぬ様にと、直孝の  
最も苦慮命令する所にして、其内外樹藝の竹木は、皆諸國の  
名産を移植す、譬へば、檜は土佐國より移し植ゑ、以て槍柄の  
用に供し、赤松樹皮赤色  
光澤ある者には、伊豫國宇和島より移し植ゑ、按ふ  
に、宇

和島藩主伊達秀宗は、直政の女婚にして、直孝の妹夫なり、蓋し其縁故を以て然るか、此は傳説あるに非ず、試に想像を云ふのみ、竹は山城國八幡山より移し植ゑ、以て旗竿及び刀劍目釘の用に供し、尾末町松下と唱ふる地の松は、土佐國より移し植ゑし類なり、土佐の松は、根地上に出でずして、道路の妨害にならざるが故なりといふ。

此松下の松を、俗にいろは松と稱す、其は四十七株あるが故なり、但し今は枯るゝものありて、其數滿たず、又植繼ありて、土佐ならぬも交れり、

築城の後、藩士に命じて、山中に松樹を植ゑしめしに、根つきあしくして、枯るゝもの多し、藩老木俣土佐守安令して、松毎に木牌を付し、各氏名を記載せしむ、是に於て皆能く生立せりといふ、校者云、古今人情の變せざるを見るべし、又城内外に、多く皂角樹を植うる者は、籠城薪盡くる時の用に供す、蓋し此樹は、生木にて能く

燃ゆるを以てなり、榎、穀、樹、冠、樹等を植うるも亦然り、

城山の樹木繁植は、直孝以來の訓誡にして、年々歳々、曾て以て懈りなかりしかば、徒に洞見せざるのみならず、一層風致をも副へたりしに、陸軍省の所轄中、明治七八年の頃にかありけん、無情にも、猥りに伐木せしが故に、即今其主要たる東南面、即ち表面の風致大に損傷せり、殆と三百年の經營、無情漢の爲めに、一朝烏有に歸す、眞に惜みても猶餘り有りといふべし、俗人の状態、深く訓誡を加へざるべからず、蓋し聞く、其人は、當時彦根分營在勤の阿波徳島人陸軍少佐某の專斷にて、後に懲誡譴責せられたりとか、其然りや否やは知らず、某後に陸軍少將に累進し、明治二十七年九月九日病歿すとか、井伊氏は勿論、吾彦根人士は、此

無情漢を忘るべからず、

此城の繩張に、三個の非難あり、其一は、繩曲るが故に、城郭及び市中の邸宅、方角皆斜なり、其二は、善利川を直流する事、其三は、原書缺けて存せず、今知るべからず、

築城費は、銀二百八十九貫四百三十一匁八分、渡し方、金奉行藤田平右衛門、高橋長十郎、慶長五年以下、井伊家諸舊記に據る、中に就す、但し草書を楷書に改むるのみ、

今按、此費額は、直孝の時、再役の費額なり、其故は、藤田平右衛門、高橋長十郎は、高橋家譜には、長四郎とあり、並に直孝分家中に仕へて、直孝本宗を嗣ぐに至りて、藩士に成りしものなり、然れば此費額は、再役のみのものたる、斷じて知るべし、但し初度の費額は、記載なければ、知りがたし、七國十二大名の助役

は、各自の負擔は無論なり、

貞丈雜記に、錢百文、古は丁百なり、近代九十六文を百文とするなり、寛永年中、寛永通寶を鑄られし頃より始る歟、といへれど、元和二年十一月廿五日の、彦根藩計算券に、慶長十九年、高宮布機錢の勘定書に、

- 一 百七拾八貫三百五拾六文      本機錢
- 一 貳拾九貫八百四拾貳文      新機錢
- 合貳百八貫貳百貳文

此合計を見るに、九十六文を以て、百文としたるを明白なれば、之に従ひ、九十六文を、百文として、計算す、元和五年、直孝江戸下向、諸入費計算券に、  
錢百零一貫百十八文を、

今云、此を調百に算すれば、

九十七貫零七拾四文となる、

銀一貫五百七拾四匁八分にて買、

右を算すれば、

銀一匁は、錢六十一文六分三釐強、

調百文は、銀一匁六分二釐二毫五絲強、

又

錢六十六貫四百七十二文を、

今云、此を調百に算すれば、

六十三貫八百十六文となる、

此銀一貫零三十五匁四分六釐強、

一分判金六十二にて買、

今云、一分判金四個を以て、金一兩とす、乃ち此五十金

兩二分、

金一兩は、

銀にては、六十六匁八分強、

調百錢にては、四貫百十七文弱、

右之相場を以て算すれば、

前件の摠費額、

銀二百八十九貫四百三十一匁八分は、

金四千三百三十二兩三分永六十一文強、

此を今の稱にすれば、

金四千三百三十二圓八十一錢一釐強なり、

此を明治三十五年五月初旬、慶長小判金一兩の價格二十

圓零三十錢に算すれば、

金八萬七千九百五十六圓零六錢三釐三毫となる、

編者は、無算の甚しきものなり、必ず違算あるべし、識者改算あらば、何の幸か之に過ぎん、

當時物價の賤くして、貨幣の貴きを見るべし、今時にては、天守樓、及び其他櫓樓の屋瓦に、破損ありて、修繕を加ふるに、足代の費額のみにて、數百圓を要すと聞く、古今價額の差豈啻天淵月窟のみならんや、實に驚くべし、

此他尙いふべき事件頗る多けれど、今は其建造物も無ければ、略しては、

爾來綿々井伊氏茲に居て、藩屏たりしが、明治四年、廢藩に至りて、陸軍省の所轄と爲り、十一年、陸軍省、城郭櫓樓を撤壞す

るに當りて、恰も好し、車駕巡幸に會し、特旨を以て、保存の恩命あり、此は叡慮に出るは、無論といへども、參議大隈重信、滋賀縣令籠手田安定、與りて力あり、亦井伊氏、及び吾彦根人士は、此二氏の恩頼をも忘るべからず、達文左の如し、

今般思召有之、舊彦根城郭、保存可致旨、被仰出候、就而も何分之儀、追而其筋、其縣へ、御達可有之候へ共、此旨及内達候也、

明治十一年十月十五日

宮内卿德大寺實則

滋賀縣令籠手田安定殿

乃ち牙城天守樓、西城三層樓、太鼓樓門、牙城の樓門にして、白天秤樓門、廊下橋樓門ともい、廊下橋樓門ともい、の四樓、天秤樓は、二樓あり、を存せり、二十四

年に至りて、更に宮内省の所轄となり、彦根御料地と稱せらる、

明治二十四年七月二十七日、伯爵井伊直憲之を借らんことを請ふ、

彦根城拜借願

宮内省御所轄、滋賀縣下、近江國彦根之城郭は、拙者祖宗之經營以來、數百年間住居候ヒシ所ニテ、尤緣故モ有之候間、可成舊觀ヲ損セザル様、保管致度候ニ付、右城郭、并ニ附屬地共、一圓拙者へ、拜借被仰付候様致度、何卒特別之御詮議ヲ以、御許可相成候様、其筋へ御執達被成下度、此段相願候也、  
明治廿四年七月廿七日

伯爵井伊直憲 印

滋賀縣知事大越亨殿

指令(朱書)

内二第五九三五號

書面願之趣、其筋へ稟請ノ上、本年十月ヨリ、向三十个年、無料貸與届候條、別紙書式ニ準シ、拜借證書差出スベシ、  
明治廿四年十月廿三日

滋賀縣知事大越亨 印

別紙

彦根御料地拜借證書

滋賀縣下、近江國、犬上郡、彦根町、

大字金龜、壹番、九番、四十六番地、舊彦根城、

彦根御料地

一 面積七萬五千八百五拾四坪九勺五才



但、城樓、土藏、其他別紙目錄ノ通、無料拜借之事、

前記ノ御料地、建物、其他有形ノ儘、明治二十四年十月ヨリ同五十四年九月マテ、三十个年間、拜借ノ儀、允許被成下候ニ付テハ、左ノ條々、堅ク遵守可仕候、

一 御料地内ニ於テ、自今後、地形ノ變換、或ハ建物模様替等ヲ要スル節ハ、繪圖面相添願出、御許可ノ上ニ無之テハ、着手仕間敷候事、

一 城樓、土藏、橋梁、石垣、柵、矢來、其他ノ諸建物、及道路、堤塘共拜借中、修繕、又ハ草薙り、掃除等ノ儀ハ、悉皆拜借人ニ於テ、負擔シ、破損ニ至ラザル様、保護可仕候事、

一 御料地内ニアル、立木竹等ハ、猥ニ伐採シ、又ハ使用致間敷候事、

一 御料地拜借期限中ト雖モ、御用ノ節ハ、拜借ノ物件悉皆速ニ返上可仕候、尤モ此場合ニ於テ、自費建築ノ建物アルトキハ、其引拂ヲ要スルニ付、相當ノ移轉料、御下渡被下候歟、又ハ相當代價ヲ以、御買上被下候ハ、他ニ要償等ノ儀、聊カ申出間敷候事、

但、拜借物件、御要用ノ旨、六個月以前ニ、御達相成候ハ、自費建築建物有之候共、無遲滯、自費ヲ以、移轉ノ上、返上可仕候事、

一 御料地内へ、住居候者有之候共、決テ本籍ヲ移シ申間敷候事、

右之條項、必ス違背仕間敷候、依テ保證人連署、御料地拜借證如件、

年月日

宿所族籍

拜借人

同

保證人

何某

何某

四〇

滋賀縣知事宛

其二

彦根御料地内諸建造物目錄

- 一 天守 此建坪七拾八坪貳合
- 一 同續櫓 此建坪七拾八坪六合四勺
- 一 同續土藏 此建坪五坪九合八勺
- 一 三階櫓 此建坪貳拾貳坪六合八勺
- 一 同續左右櫓 此建坪七拾八坪壹合八勺

- 一 太鼓門櫓 此建坪四拾壹坪八合六勺
  - 一 天坪櫓 此建坪百五坪貳合四勺
  - 一 石垣 此間數貳千八百五間四合
  - 一 柵矢來 此間數六間九合
  - 一 木橋 四个所
  - 一 井戸 拾壹个所
  - 一 石壇 七个所
- 右ハ別紙圖面ノ通ニ有之候也、  
圖面略す、

明治二十六年五月二十二日、伯爵井伊直憲拂下を請ふ、

彦根城郭拂下願

宮内省御所轄、近江國彦根ノ城郭ハ、明治廿四年十月、卅个

年ノ期限ヲ以テ、拙者へ拜借相成候ニ付、爾後保存上ニ注意シ、天主閣櫓樓等、數多ノ資ヲ投シ、大修繕ヲ加へ候儀ニ有之候へ共、何分古キ建築物ノ處、廢藩後、充分ノ修補モ無之、經過セシモノト相見エ、從テ修メハ、從テ損所ヲ生シ、既ニ客年冬期ノ如キハ、近年稀ナル深雪ニテ、爲メニ損所少カラズ、今般又修繕ヲ加へ可申、計畫中ニ有之候、儲テ右ノ如キ、修理保存ヲ圖リ候ニ付テモ、何分拜借物件ノ儀ニ候へハ、有用ヲ存シ、不用ハ賣却スル等ノ、自由ヲ得ズ、故ニ徒ニ不用物モ、其儘存在シ、有用物存續ノ利用トナラス、或ハ却テ其害ヲナスモノ有之次第ニテ、殊ニ又來ル明治廿八年ニハ、京都市ニ於テ、第四回勸業博覽會開設、加之同市奠都紀念祭執行候ニ付、近傍府縣名所舊蹟、又ハ眺望絶佳ノ

場所ハ、該二舉ヲ翼賛シ、聯帶協力ノ儀、京都市民ヨリ、彦根町民へ、協議ニ及ビ、該町民モ、同地城山ハ、眺望絶佳ニモ有之、此際内外人登覽ノ便ヲ謀リ、城櫓ノ修覆、道路ノ修理ヲ初メ、種々趣向ヲ凝シ度、企望モ有之趣ニ候、從來既ニ登覽ハ許シ來リ候慣行モ有之候末ニ付、此機會ニ、湖東景勝ノ地ニ、充分手入相成候儀ハ、何人モ企望ノ至リト存候、然ニ何分拜借物件ノ事ニ候へハ、前陳ノ如ク、利用ノ自由ヲ得サルノミナラス、之ニ向テ、百年ノ計ヲ施シ候譯ニモ、難相成候ニ付、其保存修補等モ、自然充分ニ手ヲ盡シ難ク候間、右等ノ事情御洞察相成、何卒出格ノ御詮議ヲ以テ、私へ廉價御拂下相成候ハ、同地町民へ協議、相應ノ經營ヲ盡シ、一部ノ勝景ヲ發輝セシメ度、依テハ其筋へ御執達、願意相

叶ヒ候様、御取計被成下度、此段及懇願候也、

四四

明治二十六年五月二十二日

伯爵井伊直憲

滋賀縣知事大越亨殿

達書

宮内省 甲第二四號(朱書)  
内事課

伯爵井伊直憲

彦根御料地(舊彦根城)拂下願出ノ處、特別ヲ以テ、該地所建  
物等、悉皆下賜相成候條、永久保存スヘシ、但受取方ハ、御料  
局長へ承合ヘシ、

明治二十七年五月十八日

宮内大臣子爵 土方久元朱印

### 彦根山由來記追加

西城三層樓は、何處かの天守樓を移築したりとの事を、編者  
幼年の頃、何書にてか見し事ありて、此稿を起すに當り、諸書  
を檢覈するも、見當らず、稿本には、其疑を存し置きしも、去年  
清書に方りて、削除したりしが、其後或人の説に、淺井郡小谷  
山の天守樓を移築したるなりといふ、是によりて、編者亦默  
考するに、幼年の時見し所の説も、亦爾り、然れども、亦其或人  
も、其何書に出たりやは知らず、故に亦疑を存して、後學の查  
定を待んとす、

鐘郭、即ち木柵原に、御守殿と唱へ、葵章葵章は、徳川氏の紋所なり、の建造物  
あり、陸軍省所轄中、明治の初めに、大津の營所に移築して、今は無し、此は元和六年、東福門院后西  
上の時、初め東山道との事にて、御泊城の爲めに新築したる

も、東海道通御になりて、此には御泊城無し、然れども、其儘保  
 存し、平常は封鎖したるも、毎年夏の土用十八日間は、此處  
 に直孝大坂陣使用の武器一式血痕ある蚊、及び其他の寶器の  
 蟲干は、此にてあり、井伊氏代々の甲冑の蟲干は、天守樓にてあり、御守殿虫干の守衛は、  
 藩士八人に命じ、晝夜二人ツ、詰切なり、天守樓には、平常番士あ  
 りて、蟲干の守衛は別に  
 要せ、御守殿前に、井水あり、此は築城の時鑿ちしものにて、最  
 も深し、平常は封鎖して、使用を許さず、蟲干の時に限り、之を  
 使用して、飲料に供す、編者も飲み試みしが、清冽にして甚佳  
 なり、

明治卅六年五月十六日

七十翁不能齋又識

彦根山由來記終

## 附 録

○校者云、左の文書及記録は、彦根城研究の資料となるべきものなるを以て、附録とす、初の覺書は、年代明ならず、守城考は、何人の著なるかを知らず、文化文政の頃、即ち直中退隱し、子直亮藩主たりし時のものならん。

### ○御城中御矢櫓大サ并瓦塀間數 御殿御建物大サ覺書

- 一 御天守、六間ニ十間半、
- 一 同所へ付御多聞、二間ニ十四間、
- 一 同所御廣間、六間ニ十五間、
- 一 同所へ付御臺所、三間四方ニ六間、
- 一 同所御文庫、二間ニ廿一間、

同所廿間、御檐梁、三間、  
 同所月見御檐梁、三間、  
 同所御門櫓、三間ニ十間半、  
 同御藏、二間ニ八間、廻リ柵、  
 一御本丸御臺所廻リ板塀、七十三間、但シ取タ、ミ、只今無之、  
 一御本丸瓦塀、百八十二間、  
 内十七間ハ、御天守方西ノ丸御門迄、  
 三十一間ハ、御天守方月見櫓迄、  
 十二間ハ、月見御櫓方廿間櫓迄、  
 十七間ハ、廿間御櫓方同多間迄、  
 十間ハ、多間方西ノ方御櫓迄、  
 二十六間ハ、同所西ノ丸口御門迄、  
 二十四間ハ、廊下橋方廿間御櫓迄、  
 四十五間ハ、廊下橋方鐘ツキ堂迄、

一西之丸南輪瓦塀、六十七間、  
 同所之内、御櫓ニツ、  
 内一ツハ、二間ニ五間、  
 一ツハ、三間ニ五間、  
 一同所北輪瓦塀、八十八間、  
 同所之内、二間ニ五間之御櫓ニツ、  
 一西之丸御門櫓、三間ニ十二間、  
 一同所三階御櫓、四間ニ五間、  
 同所北之取付多間、三間ニ十三間、  
 同所東之取付多間、三間ニ七間、  
 一同所御文庫、九ツ、  
 内五ツハ、二間ニ三間ツ、  
 二ツハ、三間ニ十間ツ、  
 二ツハ、二間半ニ十五間ツ、

一西ノ丸廊下橋、二間半ニ五間半、  
 同所橋之外瓦塀、三十六間、但、柵塀共、  
 同所御門櫓、二間ニ四間、  
 同所將基櫓、二間半ニ七間、  
 一御用米カ西之丸迄之登リ塀、二十九間、  
 一井戸曲輪瓦塀、三十八間、  
 同所鹽御櫓、二間ニ三間、杉ノ木原、  
 一鐘之丸廊下橋、二間ニ八間、  
 一同所北輪瓦塀、五十五間、  
 同所之内ニ、三間ニ十間多開櫓有、  
 一同所南輪瓦塀、三十一間、  
 一同所南輪、御櫓ニツ、  
 内東一ツハ、三間半ニ四間、  
 西一ツハ、四間ニ六間、

同所多開、三間ニ廿四間、  
 同所西ノ方多開、三間ニ三十一間、雪隠アリ、  
 一鐘之丸御廣間、五間ニ十一間、  
 但、享保十七壬子年、タ、ミ、江戸へ被遣、江戸御屋敷御廣間ニ成ル  
 一同所御守殿、六間半ニ七間、  
 一山崎御門櫓、二間半ニ八間、  
 同所三階御櫓、三間ニ十間、  
 同所多開御櫓、四間ニ六間、  
 一同所御門カ水手黒門迄瓦塀、二百十四間、  
 一水手黒御門御櫓、三間ニ十間、  
 同所御門カ裡御門迄瓦塀、百十六間、  
 一御裡御門櫓、二間半ニ九間、  
 同所御櫓、四間ニ四間、  
 同所カ御用米御銃炮櫓迄瓦塀、百九十一間、冠木御門迄、



一腰曲輪御櫓 三間ニ五間、四分一櫓、

同所御竹藏一个所、十六間、二个所、二間ニ十二間、右ハ取タ、ミ、今ハ無之、

一御銃炮櫓 三間ニ五間、

一御用米口御銃炮櫓 四間ニ六間、

同所多聞櫓 三間半ニ廿一間、

一同所御銃炮櫓ハ山崎御門迄瓦塼、三百十間、又御藏東坂塼、十五間、

一同所冠門ハ御鳥毛御櫓登リ塼、十五間半、

一長橋口御門櫓 三間ニ十三間、

同所山崎入口小橋ハ御門櫓迄柵瓦塼、十七間、

一同所外長橋南之御櫓 四間ニ五間、

同所北東へ多聞、二間ツ、出ル、

一山崎御竹藏、三軒、

二間ニ十六間、

二間ニ十二間半、

二間ニ十二間、

一長橋御門ハ四十九町口御門迄瓦塼、二百十間、

吉用隼丞前御櫓、四間ニ六間、

一四十九町口御門櫓 三間ニ十三間、

同所西多聞 二間ニ五間、

同東ノ多聞 二間半ニ十八間、

一同所東之多聞ハ宇津木治部右衛門前御櫓迄瓦塼、三十三間、

同御櫓 四間ニ六間、

一同所御櫓ハ中野助大夫預リ御櫓迄瓦塼、八十一間、

同所御櫓、四間ニ六間、東ノ出シ、二間ニ二間半、

一中野助大夫預リ御櫓ハ庵原主税介預リ御櫓迄瓦塼、百三十間、

同所御櫓 四間ニ六間、

一庵原主税介預リ御櫓ハ京橋口御門迄瓦塼、四十八間、

一京橋御門櫓 三間ニ十五間、

同所西ノ多間、二間半ニ十間、  
同所東ノ多間、二間半ニ四十四間半、  
同所東之御櫓、四間ニ六間、

此間瓦城書落シカ、

一 西山内藏允前角御櫓方犬塚求之介前之御櫓迄瓦城九十一間  
同所御櫓、四間ニ六間、

一 犬塚求之介前御櫓方脇内記屋敷角御櫓迄瓦城五十四間、

一 脇内記屋敷角御櫓方御馳走屋迄瓦城六十八間、

一 御馳走屋之御櫓、四間ニ六間、

同御櫓方木俣清左衛門前御門迄多間櫓、二間半ニ廿八間

同所御建物御馬屋腰懸共、三間梁ニ三十八間之内、十七匹立御馬屋、

御成御馬屋、五間ニ十間、

御馳走屋、四間半ニ十一間、

御馬屋之臺所、二間半ニ十間、但、タ、ミ今ハ無之、

五匹ノトツナキ、五尺五寸ニ五間、但シ七尺間、味噌藏三間ニ七間、同所方御

臺所へ之廊下、八尺ニ二間、

一 木俣清左衛門前御門櫓、三間ニ十二間、

同所御門方同角御櫓迄多間、二間半ニ五十間、

同所角御櫓、四間ニ五間、

一 同人屋敷東角御櫓方元大工小屋東角御櫓迄瓦城九十八間、同櫓、四間ニ六間、

一元大工小屋東角御櫓方御築山北東角御櫓迄瓦城□十□間、同櫓、四間ニ六間、

今云、印二字、  
消エテ見エズ、

一 御築山北東角御櫓方同所西北角御櫓迄瓦城四十三間、同御櫓、四間ニ六間、

一 御築山北西角御櫓方御下屋敷北西角御櫓迄瓦城八十五間、同御櫓、四間ニ

六間、

一 御下屋敷北西角御櫓方同所船止御番所迄瓦城五十六間、

一 御下屋敷前舟止メ御番所、大サ二間ニ四間半、

一 瓦城ノ柱五尺ニ一本ツ、

總シテ一サマハ、一丈ニ一ツツ、有之、

ヒカヘ柱ハ、一丈ニ一本ツツ、

一御殿表御門前橋、巾三間、長サ十一間一尺、

一裡御門橋、巾二間半、長サ十間五尺、

一黒御門、巾二間、長サ十三間、

一山崎小橋、巾二間、長サ十三間、

一御用米口橋、巾三間、長サ十五間五尺五寸、

一長橋、巾三間、長サ十八間、

一松原御藏道石橋、巾一丈一尺、長サ〇以下板橋ナリ、

一西中島北五三寸橋、巾一丈一尺、長サ四間五尺、

一松原口橋、巾三間、長サ十三間二尺三寸、

一京橋、巾四間、長サ十七間四尺、

一善利川橋、巾三間、長サ二十三間、

### 守城考

一敵何方ヨリ來ル共、先一番ニ筋方エ命、御領分界村々往還ハ勿論、逕アル處モ、皆立番ヲ置キ、注進セシムヘシ、繫キ注進ニシテモ可ナランカナレ共、人變レハ、主意間違易シ、故ニ通シ注進トス、筋方ハ、村役人ノ外ニ、口キ、共ヲ、其頭取ヲナサシムヘシ、亦様子ニヨリ、一里外ヘツナキ物見ヲ出スヘシ、  
一平田山、古城山、礮山ニ番所ヲ設ケ、遠目鏡ヲ懸ケ見切ルヘシ、敵何方來ル共論ナシ、三所ニ懸ケ可然候、

西ヨリ敵寄來ルキ

手配ノ考

本丸

一御大將御守アルヘシ、

一粧軍 一本

但、天守ノ前西南ノ方々能見ユル處ヲ考テ建ヘシ、正木舍人同此面守之、御旗小頭從之、

一御長柄 六十筋

横地佐平太守之、

一御馬印

守城ニハ立ルニ不及、納置テ警固ノ人守之、

一御直支配御近習組

一御步行

掠原杵率之、

一御鳥毛鎗 六十筋

今村源介率之、

一母衣御使番

一御目付

一鐵炮 五十挺

日下部三郎右衛門率之、

一弓 二十張

今村源之進率之、

一御持筒 御持弓 御持鎗初御手廻リ御道具不殘、

一御用使并御櫛役

一貝太鼓

一軍監

一斥候

一伊賀御步行

一御右筆

一御召馬

一馬醫

一儒者

一陣場奉行

一 御賄役 一人

但、下役從夫二十人余リ、

一 大筒數不定

一 坊主共 五六人

冠御門ヲ出テ廊下橋迄之内

一 御數旗 二十四本

廣瀬左馬助守之、

御旗添七十人步行從之、

一 御長柄 六十筋

小野田織之丞守之、

一 御烏毛鎗 百二十本

古澤左介向坂市右衛門守之、

鐘ノ丸

一 松下兩公子守之、

一 御附 兩人

一 御伽頭 五人

一 扶持方取 十人

一 平士ノ二男弟 五拾人計

一 御伽役

一 大筒 二拾挺計

隱居之内達者之分 二拾人計

東南御櫓ニハ、拾夕位ツ、ノ挾間筒ヲ配リ、北方ハ備ニ不及候、

西ノ丸

一 老候御守有ヘキ義ト奉存候、

一 御手廻人數不殘、

但、隊長ハ、御歩行組計殘シ、余ハ下ケテ、塙ヲ守ラセ可然ト奉存候、木俣源次

郎ノ歩行一組御側ニアルヘシ、

一 御物頭鐵炮三十挺弓二十張殘シ、余ハ出テ狹間ヲ守可然奉存候、

一 南向 大筒三十挺計

一 北向 大筒四十挺計

山崎臺

一 三方ノ塙押廻シテ 百廿三間

印具刑部守之、

御騎馬徒士 三拾九人

一 大筒 三十挺

隱居ノ内達者之者 三十人計

一 山崎角ノ御櫓ヲ黑御門迄 百六拾七間

奥山惠之介守之、

平士ノ二男弟 三拾九人

一 黑御門ヲ裏御門迄 百七拾二間

増田縫殿介守之、

同 三拾九人

一 裏御門ヲ表御門冠木御門迄 百五十六間

澤村外記守之、

同無足惣領 三拾人

御扶持方取 九人

一 表御門前角櫓ヲ大手御門櫓迄

宇津木兵庫守之、

役騎馬三十七騎

一 大手御門櫓ヲ西仕切冠御門迄 二百七拾三間

三浦内膳守之、

御騎馬徒士五十人

一西仕切冠御門方山崎口迄 百五十七間

松平倉之介守之、

平士無足惣領三拾九人

右之如ク配リ置、西南敵盛ナルキハ、東北ノ者共ハ、我人數之内三分ノ一ヲ其處ニ殘留置、三分ノ二ヲ率テ、西南ノ方ニ來リテ救應ス、

狹間配リ之考

一山崎口方大手口迄 數二百四

一大手口方表御門迄 同百二十四

一表御門方裏御門迄 同七十三

一裏御門方黑御門迄 同七十五

番上リ足輕百八拾人之内、堪更之者百人ヲ可得、御番頭率之守之、

一黑御門方山崎口迄 同百五十八

御家中方出ル役鐵炮弓ヲ以配之、三十人組二組余分アリ、浮足輕ト定城内四方ヲ巡リ、大切ナル方ニ救應ス、

右之如ク配リ置、タトヘハ、今度西方方敵來テ、大手ヲ第一ニ可防ナレハ、表御門邊方山崎邊迄ハ、防ニ不及之處ナレハ、各我人數三分ノ一ヲ其處ニ殘シ置、二分ノ二ヲ以テ、西南ニ來テ助クヘシ、四方共同シ心得ナリ、

御側伺公ノ外、

一御役人之分ハ、各我役所ヲ大切ニ守ルヘシ、下役人共一人モ散亂致サスヘカラス、

一兵糧渡ハ、御用米御藏所ニテ渡之ヘシ、渡シ方ハ法之通り、

一三ノ曲輪、御家中ノ妻子家内之者共不殘、二ノ曲輪、大家ノ面々屋敷一ツニ集メ置ヘシ、次第ニ苔ミ、三ノ曲輪迄自然引籠候時ニ至テハ、皆捨曲輪エ籠ラスヘシ、

一御城代一人御殿ニ相詰居ルヘシ、

一 四十人組 小荷駄奉行勝平次右衛門  
一同 町奉行 早乙目八郎左衛門  
右ヲハ二ノ曲輪浮足輕ト定晝夜巡ルヘシ、

一 二ノ曲輪

長橋口方御花畑迄凡千三拾間  
狭間數六百四十七

一 三ノ曲輪

松原口方御應部屋迄二千五拾二間

二ノ曲輪ヲ守ル割

一 長橋口方船町口迄二百十間

井伊三郎守之、

一 船町口方庵原屋敷東界迄二百四拾間

庵原齋宮守之、

一 西郷屋敷西界方佐和口迄三百間

木俣土佐守之、

一 佐和口方御花畑迄二百七十七間

長野美濃守之、

一 西郷隊ハ遊軍トシテ、諸手ニ救護スヘシ

張出シ

三ノ曲輪ヲ守ルルル

一 松原口方長曾根口迄四百五十七間

井伊三郎

一 長曾根口方中藪口迄三百五拾間

中藪口方本町口迄二百八拾六間

ル六百三十六間



庵原齋宮

一本町口方高宮口迄百七拾三間

高宮口方油懸口迄二百廿七間

油懸口方切通口迄百八拾九間

五百八拾四間

木俣土佐

一切通口方御鷹部屋迄三百七拾間

長野美濃

一西郷隊前ニ同シ、

右四隊退キ守リ所ヲ定ル爲ニ、如此ニハ記トモ、實ハ四隊ハ奇正救應シテ、相防戰ヘシ、

出張ノ割

一凡西方方敵來ルキハ、上下海道ヨリ二手ニ來ルト心得ヘシ、木俣隊ハ、高宮ニ

陣取、高宮川ノ東北ノ岸ニ矢來ヲ結ヒ、本陣ヲ宿中ニ居テ防キ守ル、尤場所ヲ考ヘ、大筒ヲ備ルコト肝要ナリ、何レノ隊トテモ同シ、

一庵原隊ハ、宇尾村ニ陣取、川ノ東北岸ヲ守ルコト木俣隊同斷、毋木俣隊ノ一手エ敵來ラハ、庵原隊進テ敵ノ腹ヲ打、或ハ挾テ打等ノ奇變ヲナスヘシ、庵原隊一手エ敵來ルトモ、木俣隊奇變ヲナスコト同斷、

一長野隊善利川東北岸ニ矢來ヲ結ヒ、橋本町ニ陣取、濱手迄ヲ守ルヘシ、

一井伊隊猿尾御番所外方切通シ迄ニ矢來ヲ結、安清町ニ陣取、猿尾方東ヲ守ルヘシ、

一西郷隊ハ、始終遊軍トシテ、奇兵ニ備ヘ、策應スヘシ、

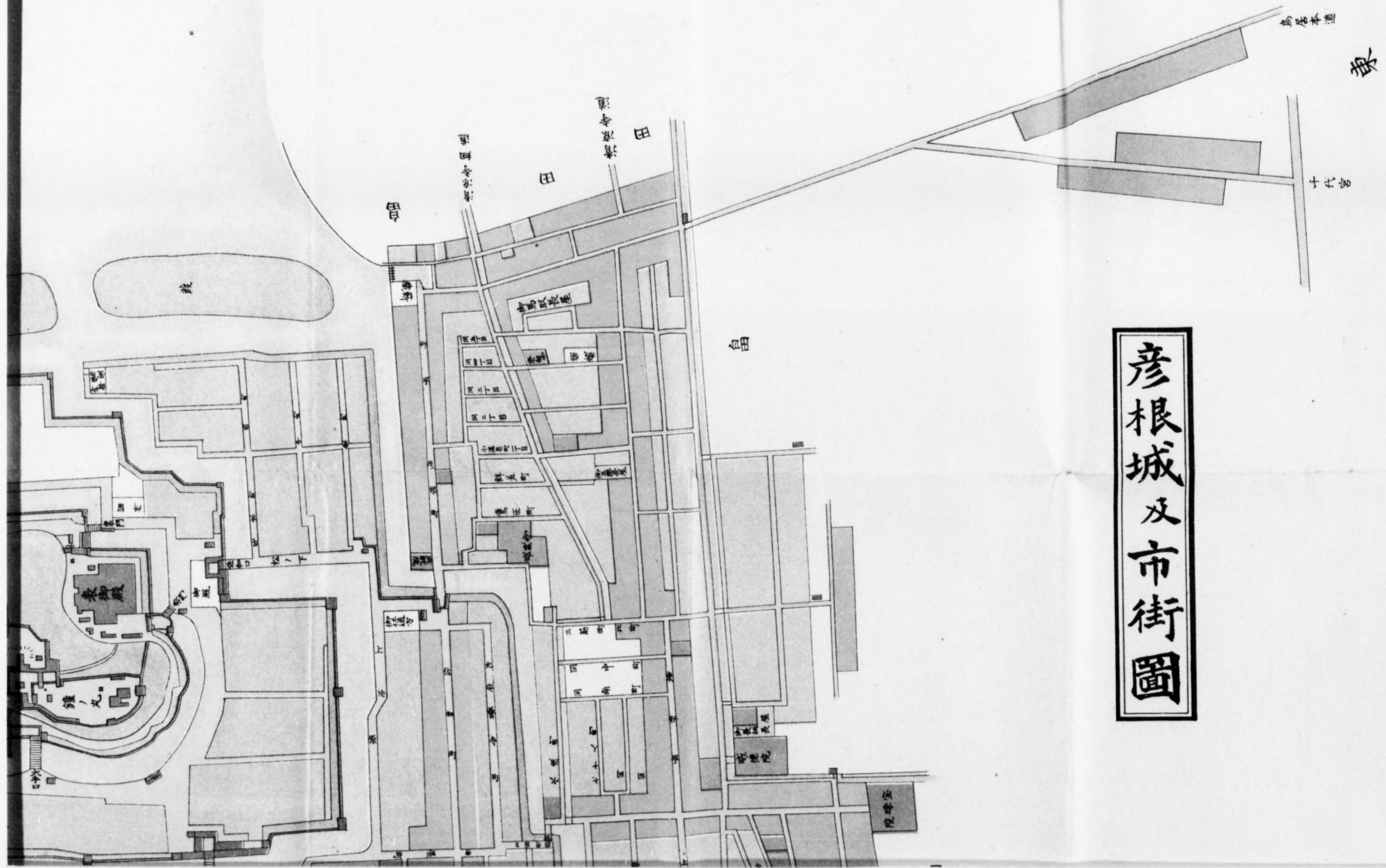
右ノ如ク出張シテ、敵ヲ近付ヌコト肝要トスヘシ、其時ハ本城ニ備、挾間ニ配タル鐵炮六百余挺ノ内ニテ、頭々各我勢ノ三分ノ一ヲ、其預ル所ニ殘シ置、三分ニテ卒ヒ出ル、隊長モ各同斷之割ヲ以テ、三分ノ一ヲ殘シ、二ヲ以テ出、物頭ト申談シ、三ノ曲輪ノ土手ヲ守ルヘシ、勝早乙目ノ二手ハ、此時モ二ノ曲輪ヲ巡テ外ニ不可出、

一五手ノ兵若答テ、三ノ曲輪ニ備ヲ立ルニ至ラハ、右之三分ニツ、ノ隊長モ鎧  
炮モ、一重退キ入テ、二ノ曲輪ヲ守ルヲ前ニ同シ、

二四

附  
録  
終

彦根城及市街圖



東

高尾本道

十代宮

白田

聖徳太子廟

聖徳太子廟

聖徳太子廟

新馬政長屋

町一丁目

町二丁目

町三丁目

小通町一丁目

新五町

徳正町

徳正町

三筋町北町

四筋町

同前町

同前町

同前町

同前町

成徳院

院瑞宝

殿

御門

松ノ下

御門

御門

御門

御門

御門

御門

御門

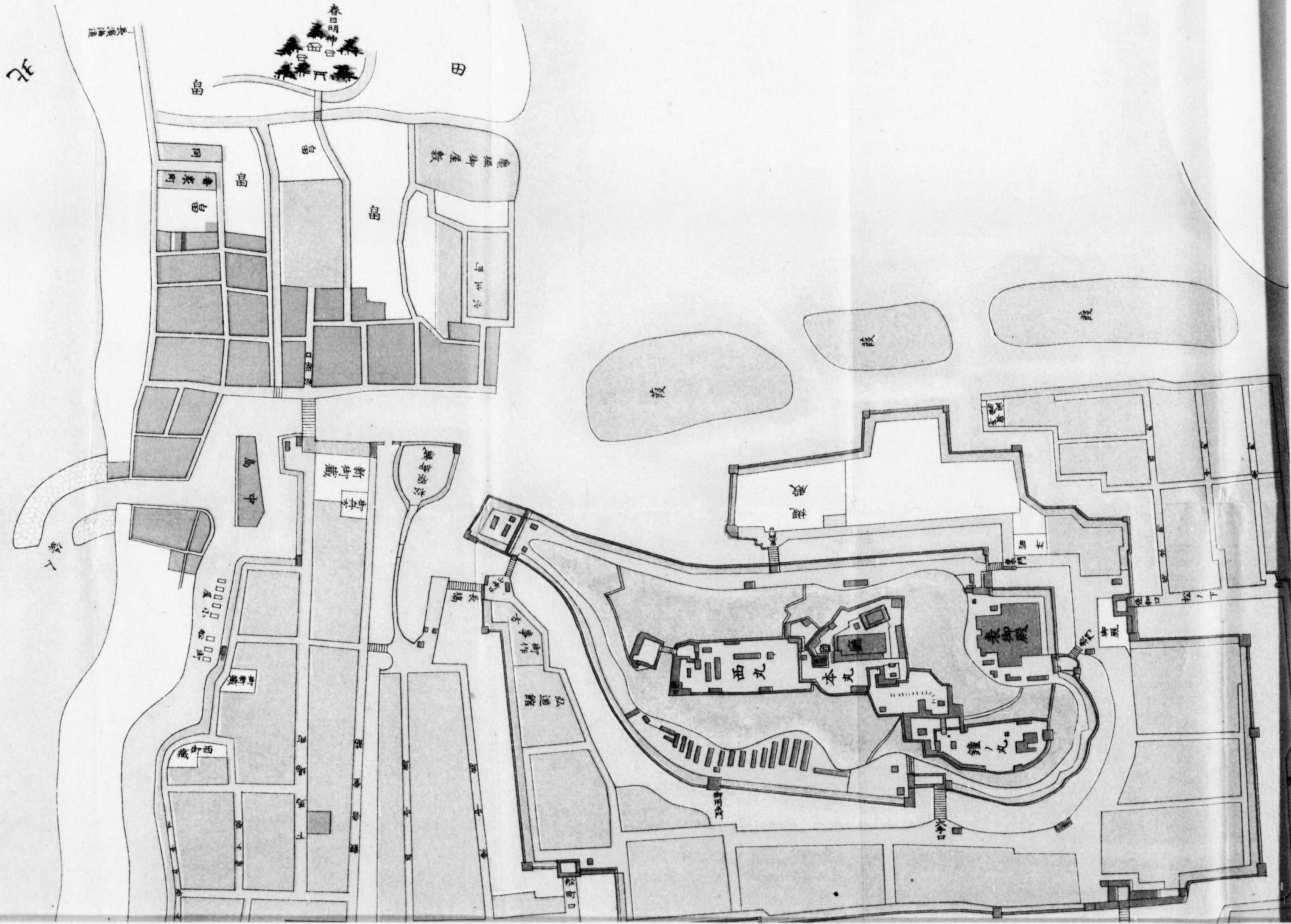
御門

御門

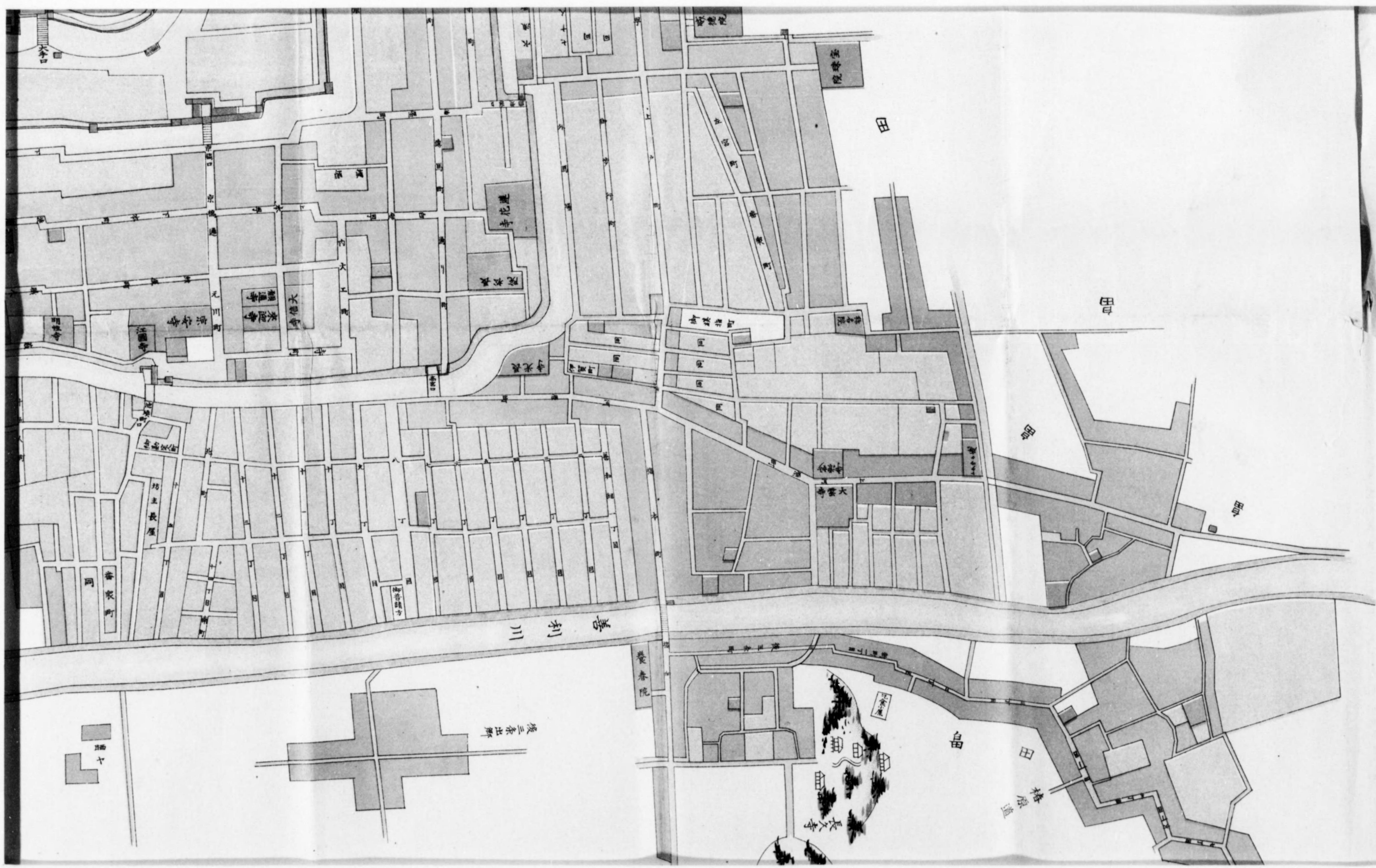
大門口

鐘ノ丸

表御殿



北



院徳大

寺花蓮

寺徳大

寺宗

院林大

院徳大

寺徳大

善利川

院春養

後三条出陣

寺父長

梅原通

田

田

田

田

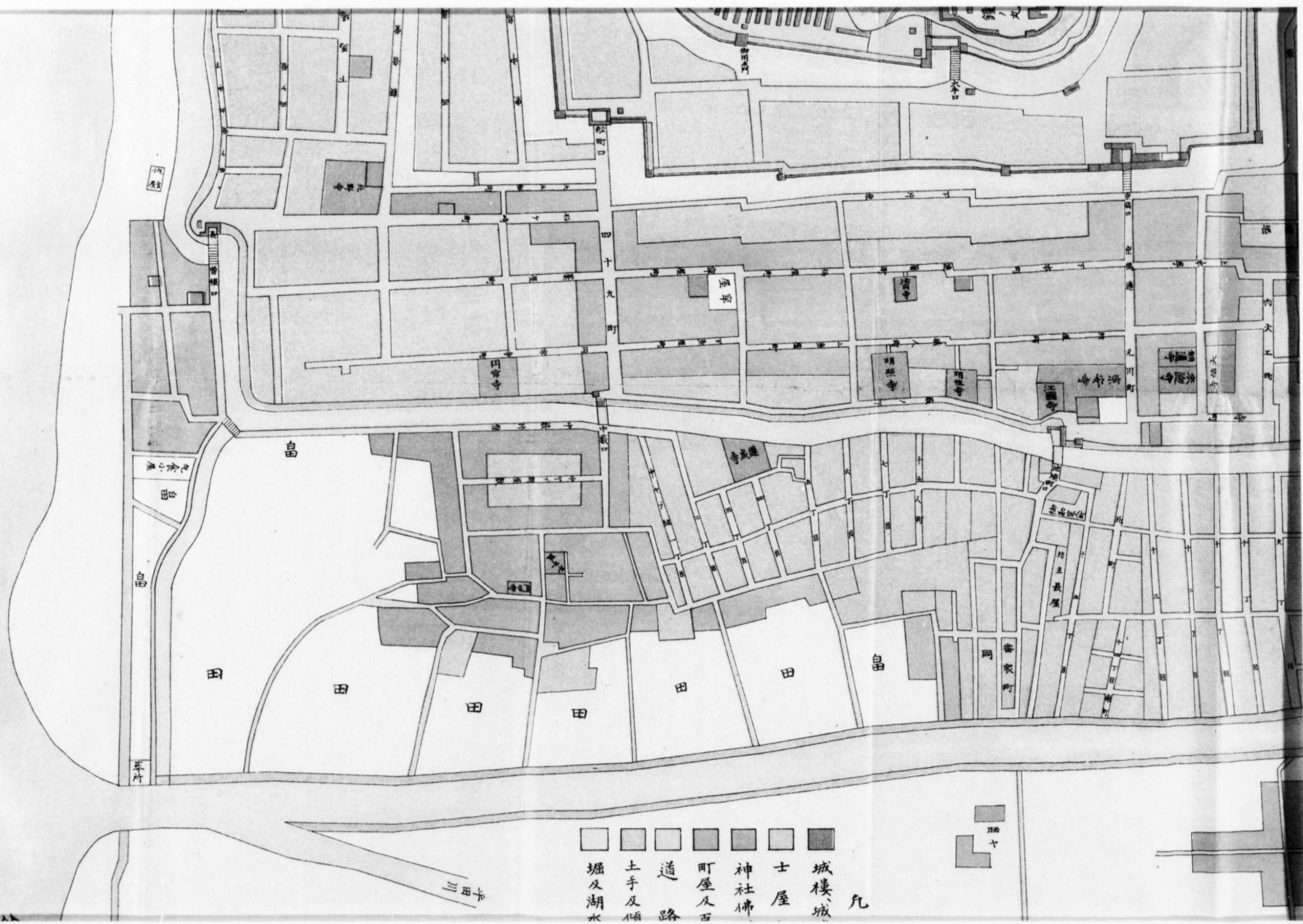
田

田

河

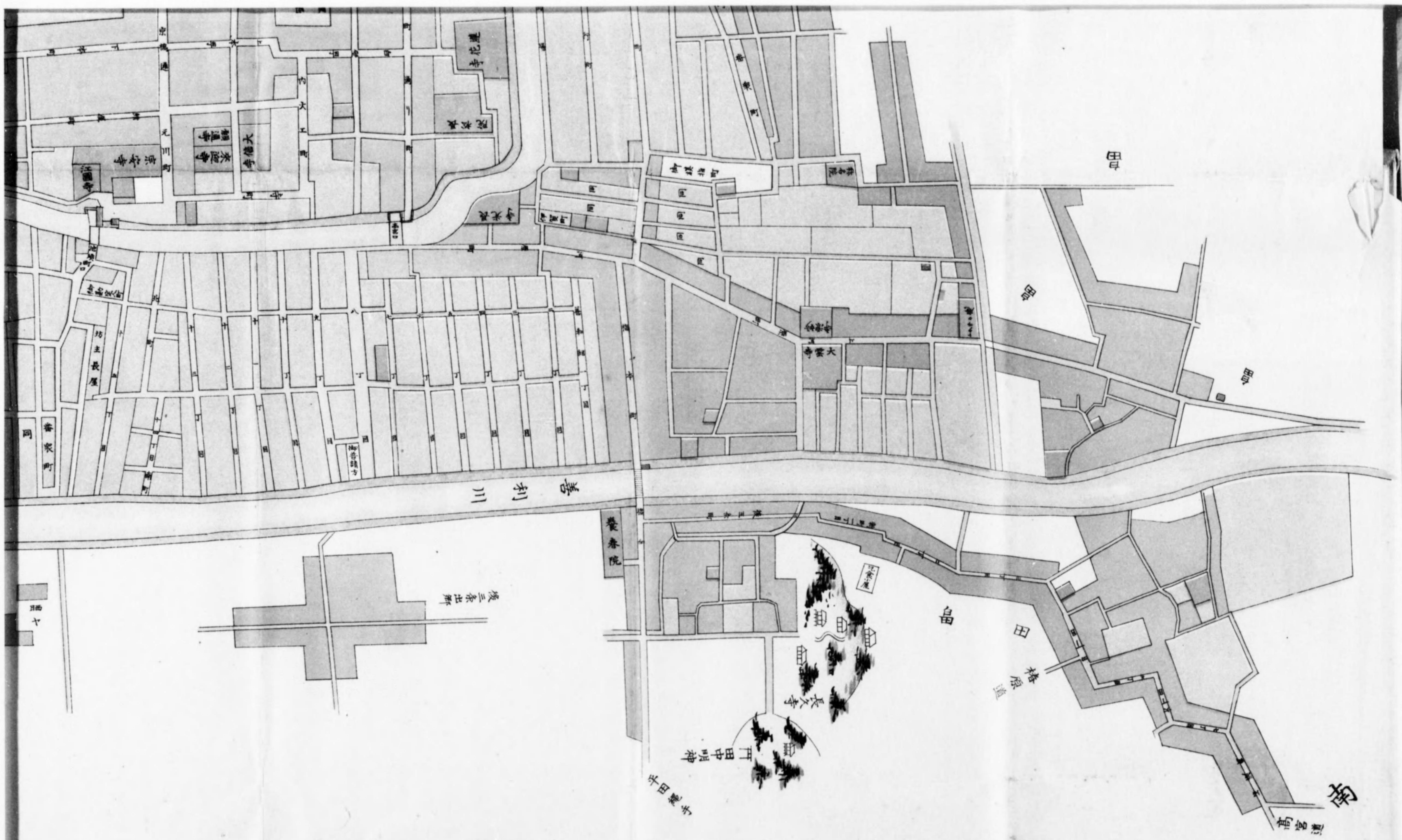
十

嘉永甲寅仲秋



- 堀及湖水
- 土手及傾
- 道路
- 町屋及百
- 神社佛
- 士屋
- 城樓城

十  
里



南

高宮道

橋原

島

長久寺

野田中明神

平田龍舟

後三条出陣

養春院

善利川

七

嘉永甲寅仲秋改

田

南濱道

草所

島

島田

九食小屋

島

田

田

田

田

田

田

島

同

番家町

坊主長屋

島田

寺成護

中藏口

田守寺

屋

明徳寺

明徳寺

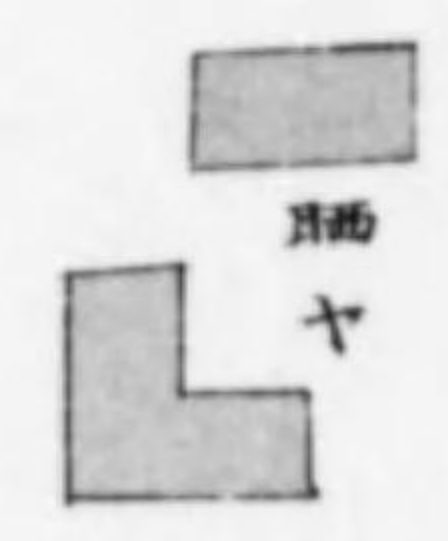
江國寺

宗文寺

宗文寺

大徳寺

- 凡例
- 城樓、城壁、及番所等
  - 士屋敷
  - 神社佛閣
  - 町屋及百姓屋
  - 道路
  - 土手及傾斜地
  - 堀及湖水



堀

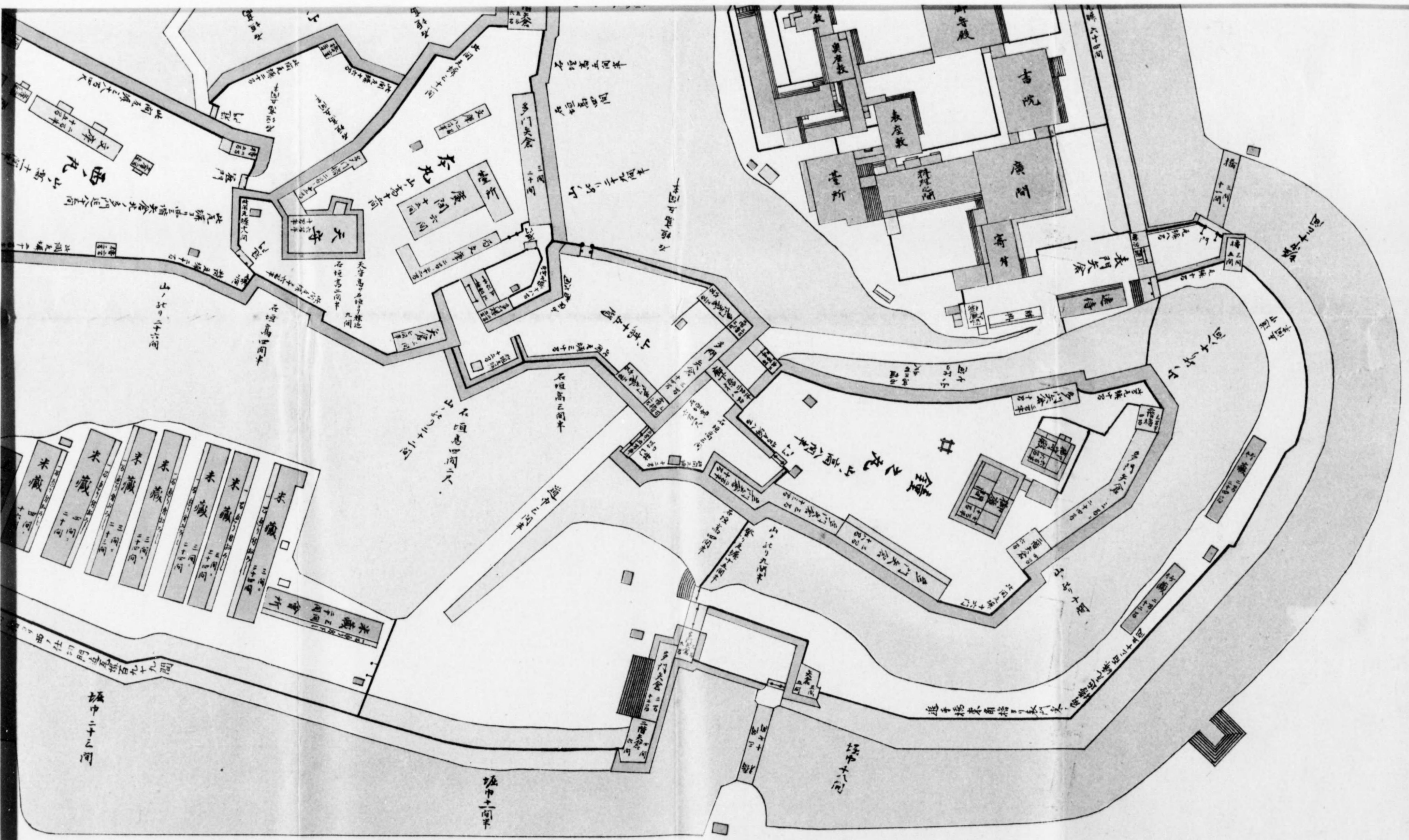
土

三田









西丸山

大門

廣明

吉院

廣明

書所

表座教

進侍

表門天倉

金九院

多門天倉

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

米藏

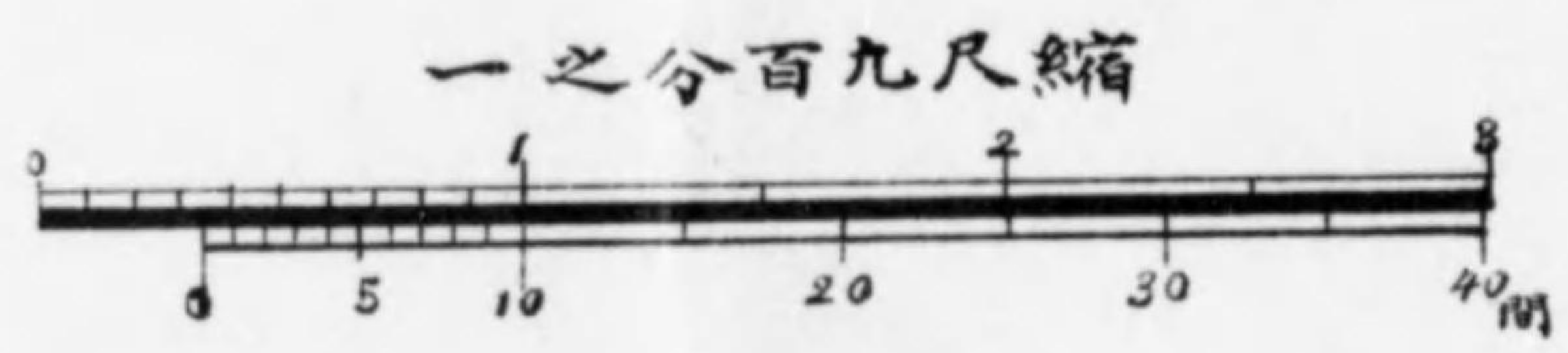
米藏

米藏

坂中十間半

坂中十八間

坂中二十二間

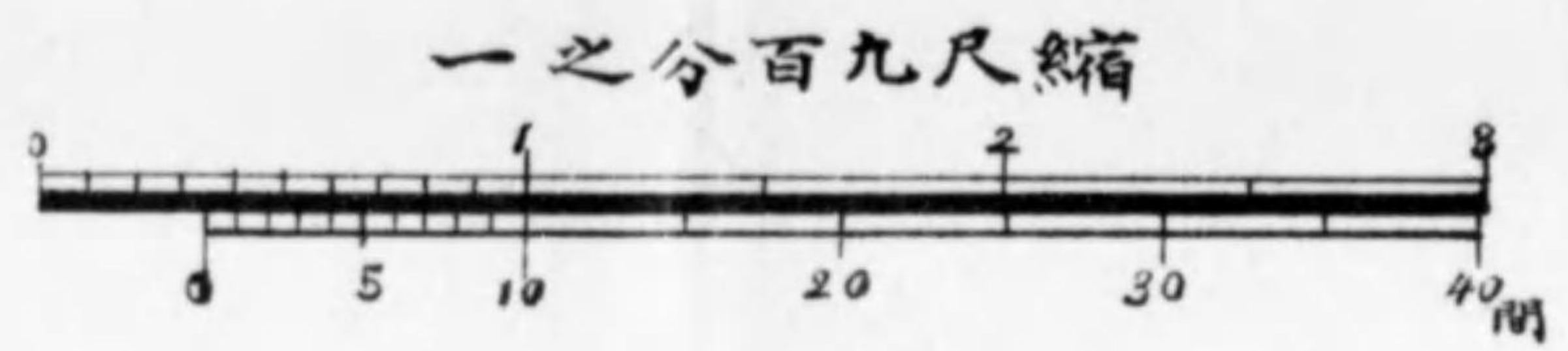


- |    |       |        |         |       |
|----|-------|--------|---------|-------|
|    |       |        |         |       |
| 番所 | 橋及板張類 | 藩主居館   | 倉米、材木類庫 | 建物及門等 |
|    |       |        |         |       |
|    | 堀     | 土手及傾斜地 | 瓦墼      | 石垣    |

九例

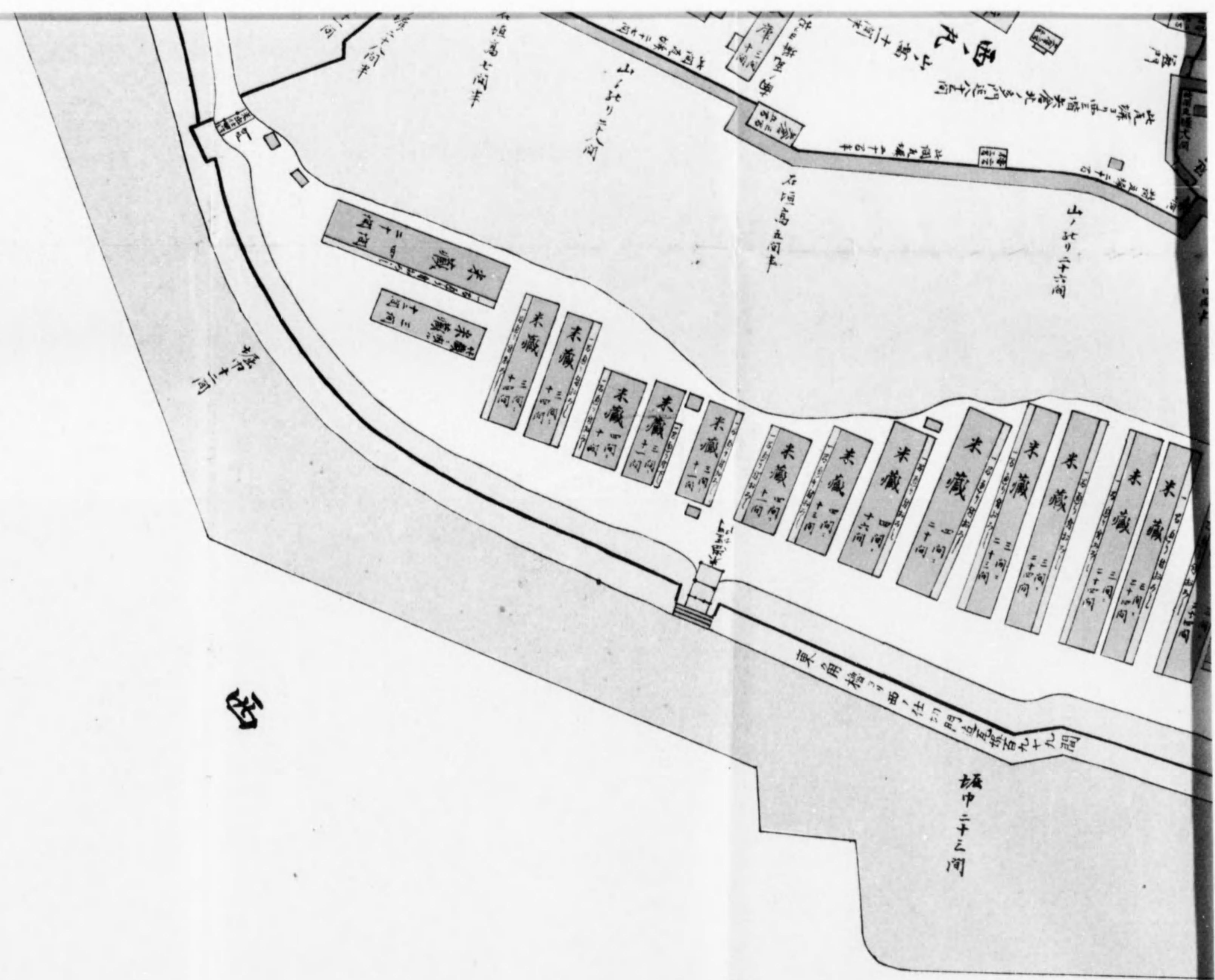






- |    |       |        |          |        |
|----|-------|--------|----------|--------|
|    |       |        |          |        |
| 番所 | 橋及板張類 | 藩主居館   | 米、材、水類倉庫 | 槽及門等建物 |
|    |       |        |          |        |
|    | 堀     | 土手及傾斜地 | 瓦墼       | 石垣     |

凡例



明治四十三年十月一日印刷  
明治四十三年十月五日發行

(非賣品)

著者 故中村不能齋

校訂者 兼發行  
東京市麴町區三番町十九番地  
中村勝麻呂

印刷者 東京市牛込區板町七番地  
渡邊八太郎

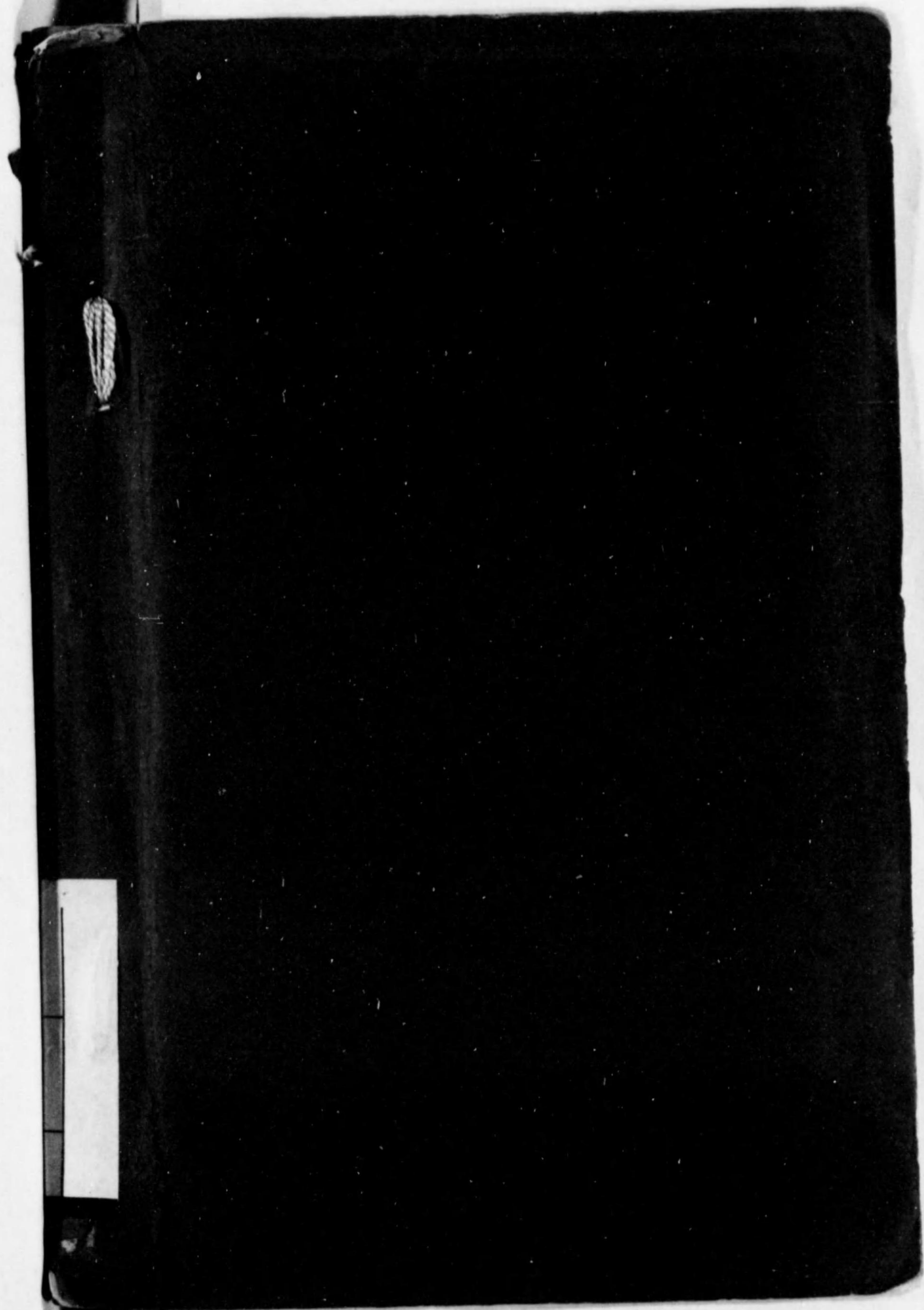
印刷所 東京市牛込區板町七番地  
日清印刷株式會社

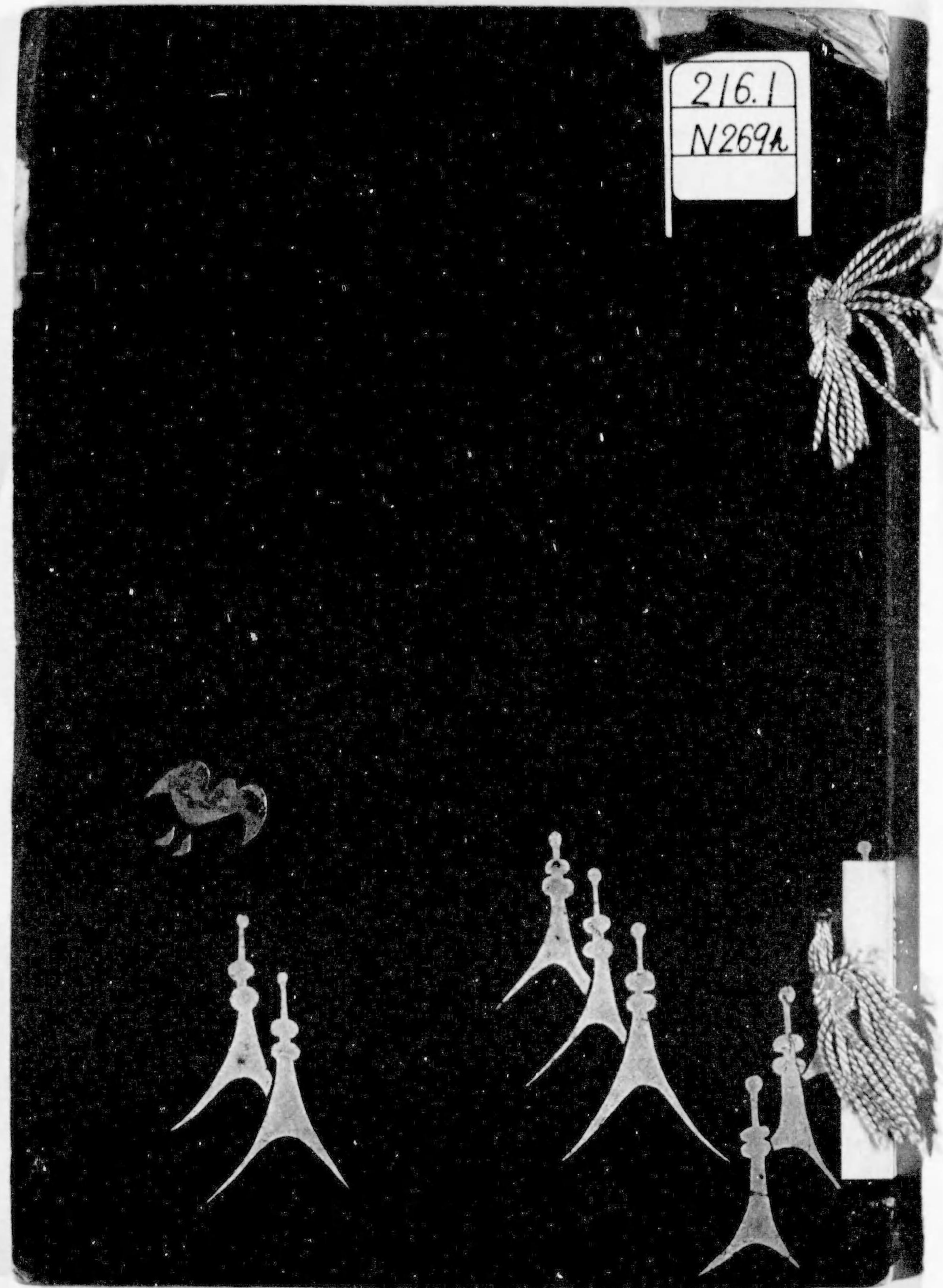
不許  
複製

D  
1905

昭和七年六月七日  
小牧實教







216.1  
N269A

025601-000-0

216.1-N269A

彦根山由来記

中村 不能斎/編

M43

ADC-3095



